水より深く青に飛べ

イナバの書き置き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

足を骨折した爆裂凡人少年と青髪ひねくれ爆裂ＪＣ水波レナの超爆裂青春ラブコメディ（仮）

目次

青春爆裂口喧嘩 ―― 1
超激烈告白合戦 ―― 14
熱烈友情確認戦 ―― 35
強襲突撃超登校 ―― 53
理想構想狂想曲 ―― 69
炎の料理少女、リブート ―― 89
文学少女恋烈戦 ―― 109
水より深くⅠ ―― 127
水より深くⅡ ―― 144
水より深くⅢ ―― 160

青春爆裂口喧嘩

「強い自分」ってなんだろう。
力が強ければそうなのか。
頭が良ければそうなのか。
中学三年生の頭で思い付く「強い自分」はどこまでも陳腐で、漫画の主人公みたいな人間だった。
つまりは「夢」――人間が生きる目的だ。
どれだけ正しくても、邪でも構わないから目指す目標に向かって、「夢」を燃やして一心不乱に突き進む。
人が強くなるのはきっとそう言う時なんだと思う。
そうやって強くなろうとする人はきっと誰よりも輝いて、人生の醍醐味を味わっているに違いない。
そんでもってこの世界で生きる誰もが輝くチャンスを掴みたがっている。
「夢」を持った人は強いから。
「夢」を持った人は挑む事が出来るから。

でも、皆が皆「夢」を持っているかと言われればそうじゃない。
だって明日の事まで考えて生きられるヤツなんて、そんなに多くないだろうから。
町を行き交うサラリーマンの何割かは単なる惰性で働いてるだろうし、学生の半分位は今日を楽しく生きる事しか考えてない筈だ。
別にそれが悪い事だとは思わない。
だって僕も「夢」が見つからないから。
スポーツをやっても、勉強に励んでも、娯楽に耽っても、何にも得られなかった。
折角入った部活はすぐに止めちゃったし、習い事なんてのも長続きしない、無気力人間としか言いようがない有り様だ。
挙げ句の果てに、今年で受験だってのに志望校すら決まっちゃいない。
まあ、端的に言えば僕は思春期特有の「フクザツな時期」とやらに突入していた。
だけど、僕はどうにかしてその状況から抜け出さなきゃいけない。
だってそうだろ？
ただ飯食って学校行って寝るだけの人間に何の意味があるんだ。
親に心配かけさせて、別に裕福って訳でもないのに金使わせて。
これが、これが僕か。
ただの無能じゃないか。

ホントにこんなんで良いのか。
これが――――いや、今は止めておこう。
愚痴った所でどうにかなる話じゃないし、「夢」は自分で見付けなきゃならない。
大体僕の志望校なんて今言いたい事には全く以て無関係なんだし。
さて。
何でこんな回りくどい、しかも面白くない自分語りをしているのかと言えば――――

目の前で車に轢かれようとしている同級生を見たときどうすべきなのか、と言う話だよ。

いつも通り、何でもない1日だった。
死ぬほどつまらない数学の授業をどうにか乗り越え、のんびりと気が赴くままに寄り道しながら帰宅しよう。
そんな風に頭を空っぽにしながら横断歩道を渡ろうとした、その時の事だった。
兎に角運が悪かった、の一言に尽きている。
ただソイツ――――隣のクラスの女の子は急いでいて、車の運転手は持病でも悪化して意識が無かったのだろう。

だから信号が変わっていの一番に飛び出したその子だけが轢かれようとしているのも運が悪かった、としか言いようがない。
僕はただバカみたいに口を開けたまま、ソイツがぺしゃんこになるのを成す術もなく見ているだけだった。
普通は、そうだよな。
でも、何故か僕は動けた。
他の誰も動けない中で、自分だけが踏み出せていた。
全く、何も考えていなかったんだ。
ただ荷物も全部放り投げて、ソイツを車の進路から突き飛ばして――そんで代わりにぺしゃんこになっちゃった訳だ。
……恥ずかしいけどさ。
僕は「キミ」に一目惚れしちゃったのかもね。
「キミ」はＬｉｎｋＳのニューアルバムを買いに行こうとしてたから、あんなに急いでたんだろ。
それで誰よりも早く、誰よりも前へ踏み出した「キミ」が何だか眩しかったんだ。
「キミ」以外が踏み出してたらその子に惚れてたのかもしれないけど、あの時踏み出したのは間違いなく「キミ」だ。

だから「キミ」と話してみたい。「キミ」の隣に立ってみたい。「キミ」の好きな音楽を聴いてみたい。そんな思いがぼくの足を勝手に動かしたって事。

自分でも言ってて恥ずかしいけど、これが愛の為せる業ってヤツじゃないかな。

それから両足がへし折れて病院に担ぎ込まれたワケだけど、「キミ」はよく見舞いに来てくれたね。

しかも殆ど毎日、授業のノートだって見せてくれると来たらもう薔薇色の入院生活だったよ、正直。

……まあ、「キミ」がホントの姿で来てくれたなら最高だったけど、それは流石に高望みし過ぎだったかな。

今なら信じられる。

「キミ」は魔法少女ってヤツなんだろ。

僕に顔向け出来ないとかそんな感じの事を考えてたから、ももこさん——友達に変身してた。違うか？

いや、別に責めようとしてる訳じゃないんだ。

さっき教えてくれたから別に構わないし、実は「キミ」が隣にいてくれたと思えばクソつまらない病室だって天国だ。

まあ兎に角、僕は「キミ」に救われたんだよ。

ＬｉｎｋＳに嵌まったのも「キミ」が教えてくれたからだし、多分人生で一番楽しかった。
物理的にはクソ雑魚ナメクジもいい所だけど、多分精神的には「最強」だった。
超強かった。
だから。
だから教えてよ、水波レナ。

「キミはどうして『木漏れ日の小屋』の２０食限定プリンを毎日持ってくるんだい？」

■■■

「強い自分」って何？
頭が良い人とか運動神経が良い人とかは一杯いるけど、多分それだけじゃない。
それで足りるんだったら、皆もっと強い筈。
足りない何かを探しているからホントは弱いの。
レナだってその１人。

すぐイライラする自分が嫌い。
感情を上手く表現出来ない自分が嫌い。
感謝をちゃんと伝えられない自分が大嫌い。
それを全部分かっていながら、変えられない自分が1番嫌い。
どこまでもひねくれたまま、無為に今日を生きているのがやるせないってワケ。
レナは弱いって、ずっと前から分かってる。
レナを傷付けるモノなんて思ってるよりずっと少なくて、人の温かさが外にはあると知ってるのに自分の殻に閉じ籠って、意味も無く隙間から外を窺っているだけの意気地無し。
思ったままを伝える事すら出来ないのがレナの「弱さ」。
だからそう。
多分、「素直な人」が強い人。
自分を偽らずに、思うがままに生きられる人がホントの強さを持ってる。
レナがどれだけ手を伸ばしても、絶対に届かない強さを、皆は探している。
皆、途中で足を止めてしまったレナとは違うの。
他人に変身する事で、誰かを模倣して得たレナとは絶対に違う。
……別に、キュウべえと契約した事に後悔なんてしていない。

実際、他人に成った時だけ得られる爽快感はレナを自由にしてくれた。
言いたい事を言うべき時に言える。
誰かを傷つけずに会話出来る。
魔法ってホント最高！
ゲーセンの機械に当たるよりずっと健全で、普段抱えているもどかしさを吐き出すにもピッタリだった。
そしてだからこそ、レナ自身の浅ましさが際立つの。
誰かの心の余裕に触れる度に、その器の大きさを妬んだ。
誰かの優しさに触れる度に、それを持てない自分を恨んだ。
そんなレナが益々嫌になって、消えてしまいたくなっちゃう。
……何よ、文句あんの？
無いならもう少し黙って聞いてて。
正直、レナはアンタがとっても羨ましかった。
レナを突き飛ばしたのも咄嗟の行動って言ってたけど、それって余計な打算とかが一切無かったって事でしょ？
知りたかったの、何でアンタがそんなに強いのか。
知りたかったの、何で素直にいられるのか。

それで、それで――――

それだけ。

結局レナは「レナとして」会いに行く事すら怖がった意気地無し。

態々助けてくれたアンタがレナを傷付けるなんて有り得ないのに、その「もしも」が頭の中を過っちゃった。

アンタの見舞いに態々ももこの姿を借りて行ったのもそれが理由――我ながら、人としてどうかしてるわ。

けど、それもここまで。

弱いレナは今日で終わりにしてみせる。

自分が嫌いなレナに今度こそトドメを刺して、心から笑えるレナになってみせる。

だから、教えなさいよ。

■■■

「アンタなんで毎日ＬｉｎｋＳのＣＤ爆音で流しながら待ち受けてんの？」

「キ、キミなぁ……！このプリンすっごい並ぶヤツだろっ！そんな事しなくたって何でも答えるから止めてくれよぉっ！」
「はあ……!?な、何よ！要らないって訳!?折角2時間も並んだのにぃ！」
「要らないなんて言ってないだろ！腐らせると良くないから冷蔵庫に詰めとくよ！ありがとなぁ！」
「そう、そうよ！感謝して有り難く食べれば――って違う！今日こそ強さの秘訣、聞かせてもらうから！」
「だから知らないって！」
　神浜市は新西区、総合病院里見メディカルセンターの一室で、今日もまた怒号が飛び交っていた。
　この極めて品性に欠ける口喧嘩は、ここ1ヶ月ほぼ毎日の事である。
「だっ……大体此処病院なのよ!?こんなバカみたいな音量でＣＤ流すとか信じらんない！」
「隣室の人の許可は取ってますぅー！キミこそ頭固すぎるんじゃないのか！もっとバカになれよバカに！」
　しかしながら行き交う患者も、医療関係者もそれに気を留める事はない。

病院生活が無機質で退屈が故に、誰もが刺激を求めているのだ。
故に野次馬こそあれど止めようとする者は誰1人としていない。
最早少年少女の喧嘩は病院名物と化していた。
「バカって何よバカって！言い方って物があるでしょうがこのバカ！」
「はぁ⁉バカって言ったのはキミが先だろこの中途半端バカ！それに美人なんだからその無駄な自己嫌悪止めろってずぅぅぅっと言ってんだろバーカ！」
「———ッ！この能天気バカ！お人好しバカ！バカバカバーカっ！」
仮にも中学3年生がこの物言いである。
しかしこのルール無用、論理無用の時間無制限デスマッチを誰もが止めようとしない理由がもう1つあった。
「バカって言った方がバカなんだからもっとバカになれよ！ほら！もっと！」
「バカになったら素直になれるって言いたいのこのバカ！レナはアンタ程単純じゃないもん！」
「あーそうだな！お前他人思いだけど上手く伝えらんないだけの引っ込み思案バカだもんなぁ！もっと素直バカになれば可愛いのになぁ！」
「は、はぁ⁉アンタに可愛いとか言われても嬉しくないんだけど！」
「だぁから素直になればって言ってんだろうがこのバカ！」

「だからその方法を教えなさいっつってんでしょうがこのバカ！」
　このように貶すように見せて互いを褒めちぎっている辺り、もう誰もがそう言う風にしか見ていないのだ。
　だから止めない。ただ見守るだけなのだ。それは今この瞬間を逃したら２度と戻ってこない、そして誰もが知っている「答え」だから。
「ハイそこまでぇ！この場はアタシが預かった！」
「も、ももこ!?」
「ももこさん!?」
　スパァン、と勢い良く扉を開けた金髪少女――十咎ももこすらその「答え」を知る１人である。
　そう、それは明日の命も分からない患者にとって、今日の命を痛感させる活力だった。
　それはただ流れる日々に退屈を持て余す患者にぶちこまれた劇薬だった。
　それは夢見る明日を失った人に、僅かな希望をお裾分けする騒音だった。
　即ち――――
「ホントお前ら青春してるなぁ！」

――学生の特権、青春である。

超激烈告白合戦

「……あのさ、1つ良い？」
「……何？」
青髪少女――水波レナの質問を受けた少年の瞳が、スッと持ち上がった。
蓄積した疲労を滲ませる黒い瞳が、レナの碧眼を真っ直ぐに貫く。

「――アンタ何でこんなにバカなの？」
「止めてくれないか……」
里見メディカルセンターの一室、ベッドテーブル越しに対面する少年は羞恥から頭を抱えた。
この少年は別に秀才と言う訳ではない。寧ろ毎日を流されるまま過ごしていたので、精々平均点を少し越える程度の学力しか持たないのである。
しかも数学。よりにもよって数学である。
少年は昔から数学が大嫌いだ。

「四則演算出来れば生活は問題ないんだし良いじゃん」とか「因数は分解すんな。そっとしておけ」とか真顔で宣う位に数学が苦手なのだ。

加えて今回の事故で入院した事により、学校の授業から置いていかれるのは最早不可避と言えよう。

「もうちょっと言葉を選んでくれ、頼むから……」

「どれだけ言葉を捻っても現実は変わらないわ。諦めてキリキリ解きなさいよ」

別にそれだけなら構わなかった。

元からどうしようもない科目が更にどうしようもなくなるだけで、さしたる問題ではない。

だが少年にとって真に不運だったのは、レナの存在である。このツンツン不器用少女は本人が思うよりずっと面倒見が良いのだ。

共働きの両親に代わって弟の世話を焼く事が多い彼女はその経験を存分に生かし、ややスパルタに思える程熱心に勉強を教えているのである。

面倒臭がりな少年にとっては、その善意が拷問に等しい。

「アンタね、いくらウチがエスカレーター式だからって油断して良いって話にはならないでしょうが」

「ハイ……本当に仰る通りです……」

正論の槍が少年に突き刺さる。
神浜市立大附属学校は名前からも分かる通り附属校だ。小学校から大学まで一貫なのだから、1度合格してしまえば後は遊んでいても構わない――そんな弛んだ空気が何処かに存在するのは事実である。
そしてレナは、弛んだ空気にどっぷりと浸かったふやけ少年を引き摺り出す事に決めているのだ。
最早少年の救いは机の端で「辻斬り☆プリンセス」を垂れ流すＣＤプレーヤーだけだった。
「アンタが退学でもしたら、素直になれる秘密が聞けないじゃない。もっと頑張りなさい」
「……オカンか」
「――何か言った？」
正論の鞭で打ちのめされた少年は思わず心の内を漏らしてしまった。
そしてそれを聞き逃すレナではない。
絶対零度の目線を少年に送るが――
「いや、包容力があるなと思って。説明も分かりやすいしなぁ」
「な、なによ急に。気持ち悪い！そんな事を言ってもレナは優しくなんてしないわ！」

「何だよ、褒めちゃいけないのか？それなら撤回するけ――」

「――褒めるな、なんてレナは言ってないじゃない」

チョロい。圧倒的にチョロい。

昨今のラノベヒロイン等目じゃない位のチョロさである。

これもレナの自己肯定感の低さ故か、兎に角少しでも褒められるだけで目に見えて機嫌が良くなるのだ。

少年とてそれが分からない訳ではなかったし、寧ろそう言う所が可愛いとすら思っている。

そしてこのやり取りが漫才染みているが故に病院名物へと昇華されてしまったのだが――

「一応中三なんだから、手を抜くのは止めとくのね――と言うよりレナの目が黒い内は赤点なんて取らせないわよ！」

――しかしその賛辞が少年の受難を加速させた。

少年がどれだけ泣こうが喚こうが真っ当な生徒に更正させて見せる、と明後日の方向に不退転の決意を抱きつつ上機嫌なレナは机に広げた問題集へと向き直ってしまったのだ。

このポンコツ少年が数学から逃れる術など、最早何一つとして残されていなかった。

■■■

レナはどうしても素直になれない。
思った言葉を口に出せない。
楽しい事も、悲しい事も、感謝の１つさえちゃんと伝えられないわ。
ホントはアンタがＬｉｎｋＳに嵌まってくれたのも叫びたくなる位嬉しいのに、レナの口は思ってもいない罵詈雑言を吐き出しちゃう。
それもまた、今日で終わらせたい。
「ほら、後半分じゃない。やっぱりちゃんとやれば出来るんだから、普段から予習復習位したらいいのに……」
「おー、そうだな……」
レナはただ頭が良ければ強い人間だなんて思っていない。
人の心の有り様が強さを決める。
より素直な、より誠実な人が強い――だからそうじゃないレナは弱い。
この理屈がレナを突き動かす道理なの。

この因数分解を前にウンウン唸っている冴えないアンタが何故強さを持っているのか。

何故アンタは「レナを助ける為だけ」に動けたのか。

「大丈夫よ。レナが付いてる以上赤点なんて絶対取らせないわ」

「マジで助かるよ……」

知りたい。レナは全てを知りたい。

アンタの強さを知ればきっと強くなれる。素直になって伝えたい事をちゃんと伝えられるようになる。

そうすればきっと感謝出来るようになるから。

あの日、初めて見舞いに行った時から未だに口に出せていない「ありがとう」の一言を伝える為に、レナは此処にいるの。

「あのさ」

「……何よ」

そうしてレナが1人感傷に浸っていると、不意にアンタが口を開いた。

普段の抜けた表情ではない、真剣そのものな面持ちにドキリとしちゃう。

「いや、ホントに普段から助けられてるなって。学校での友達付き合いとかもあるだろうに、毎日来てくれてさ」

「別に、今に始まった事じゃないでしょ」
「いやまあ、それでもさ――――」
ぎこちなく切り出したアンタの言葉を直ぐに遮る。
これはレナの自己満足。償いだとか言い繕っても、結局は自分の欲求のまま動いているだけ。
「強い自分」を持っている人に執着して、「あわよくばレナもそうなれたら」なんて浅ましい事ばっかり考えてるの。
なのに、なのに――――

「ありがとな、ホント」
「……ッ！」
ズルい。
ズル過ぎる。
アンタの言葉はレナの頭をどろどろに蕩かしちゃう。
たった一言で意識して顔を引き締めていないとニヤケそうになるとか、ホントバカみたい。
だけど、だけど心地良い。

「き、急に感謝されたって何も出ないわよ……！」
「良いだろ別に。色々助けられてるのは事実なんだからさ」
「――っ！」
ホントに、ホントにコイツは！
レナがどれだけ願っても、悩んでも出来ない事がなんでアンタには出来ちゃうの？
色々と抜けてるし、目立つワケでもないし、それで、それで――――
「ね、ねぇ……」
「ん、なに？」
レナを救ってくれた人。
レナに道標を教えてくれる人。
レナの憧れ。
そしてレナは恩人から「強さ」を搾り取ろうとする卑怯者。
正直、レナは自分が嫌になりそうよ。
「その、何でレナを助けてくれたの？同級生って言っても、話した事すら無かったじゃない」
「……急にどしたの？」
「いいから、答えて」

いきなりこんな事を聞かれたらそりゃ困惑するでしょうね。
でも、レナはアンタ程実直になれない。
なりたい、と思ってるだけで1歩踏み出せない臆病者。
だから、たった一言「ありがとう」が言えないレナを許して――なんて甘すぎるけど、
もうちょっと待って欲しい。
「ああ、まあ、うん――――」
耳を澄まして、アンタの答えを待つ。
そう、アンタの「強さ」の本質はレナを突き飛ばしたあの一瞬にある。
誰にでも出来るワケじゃないその行為を、何故アンタだけが出来たのか。
だから今、此処で教えて欲しいの。
それで全て終わらせられる。
後ろめたさを抱えたまま病室の扉を叩く必要も無くなる。
心の底から感謝を伝えられる――――！

「一目惚れかな」
一目惚れ。

ひとめぼれ。
ひとめ、ぼれ――――――？

■■■

「なぁッ!?ひ、ひひひ一目惚れぇッ!?」
「そうだけど、悪いか」
「悪いわよ！」
真顔で一目惚れ宣言をした少年とは対照的に、突然の羞恥に晒されたレナの頬は真っ赤に染まった。
そして自らの醜態を秘匿すべく両手で顔を覆ったレナを他所に、少年は告白染みた宣言を続行する。
「キミはあの日、ＬｉｎｋＳのニューアルバムを買うために急いでたんだよな。まあ、端的に言ってしまえばその時のキミに惚れちゃったんだ」
「ね、ねぇちょっと――――」
「僕には夢中になれる『何か』が無かったから一心不乱に走るキミがカッコよくて、眩しくて」

「ちょっと待って――――」
「それなのにそんなキミを車風情が妨げようってんだからいても立ってもいられなくて、ねぇ？」
「待ってってば――――」
（な、何よこれぇ……!?）
　圧倒的な連撃が、少年の口から次々と繰り出される。
「勉学」から「褒めちぎり」へと土俵が変わった事で、レナの攻勢は敢えなく潰えてしまったのだ。
　だがこの自体を招いたのがレナ自身である以上、この羞恥による熱もまた自分自身で抱えるしかない。
（ヤバい……ヤバいヤバいヤバい！このままだと絶対にヤバい！）
　レナは不用意に話を切り替えてしまった事を後悔しつつ、しかしその羞恥による火照りの最中反撃を狙ってもいた。
「バカな事言ってないで、目の前の問題に集中なさいよ！」
　とでも割って入れさえすれば、まだ目の前のクサいセリフ製造機を止められる可能性はある。
　そう、切り出したのがレナであるならば、終わらせるタイミングもまたある程度はレ

ナ次第なのだ。
「で、ここまでは良いかな」
「ふ、ふぅん。まあレナを助けてくれた理由は分かったわ」
「そっか、良かった……」
少年は息継ぎとばかりに口撃を緩め、一度大きくため息をついた。
レナはそれを捉えると、何故だかやたらにやける口元を引き締めながらその隙をつく
――いや、つこうとしたのだ。
そのため息が、会心の一撃の予備動作とも知らずに。
「それで毎日僕の好きなプリンを『偶々余ったから』とか言って差し入れてくれるのはもうホントに可愛かったよね」
「なぁ――――ッ!?」
「なんで」「嘘でしょ」そんな疑問と驚愕がレナの脳内で爆発する。
完璧だった筈だ。
自然だった筈だ。
ならばいつから、何故バレた。
レナがどれだけの自身の記憶を辿っても、不自然な点は見当たらない。
「いや、バレバレだから。あんな露骨なのが分からないワケないだろ」

「嘘よぉっ！」
「なんならこの病院の大体の人が知ってると思うぞ、試しにういちゃんにでも聞いてみるか？」
――とレナだけが思い込んでいたのである。
献身を大衆に暴露されるとは何とも不憫だが、病院と言う娯楽に乏しい環境に於いて噂や人の恋バナは光より早く駆け巡るモノだ。
故にレナが毎日見舞いに訪れて、その度に少年が好きなプリンを差し入れている事は既に周知の事実だったのである。
「忘れて！今！此処で！記憶を消しなさいよ！消さないと――」
「別に腕を折ったワケでもないのに食べさせてくれたりな。アレ所謂『あーん』ってヤツで良いのかな」
「――――ッ!?」
ここまで来ると、最早レナは言葉にならない悲鳴を上げるしかない。
確かに、したのだ。
間違いなくレナはプリンをスプーンで掬い、少年の口に運んだ経験がある。
だがそれは初めての見舞いで気が動転していたからであり、断じてそう言う意図で行ったのではない――――とレナは心の中で必死に言い訳を重ねた。

そうでもしないと、自分を保てなくなりそうだった。
（違うッ！違う違う違うッ！有り得ない、絶対にこんな事は有り得ないの――――）
「僕はレナが好きだな、ＬＩＫＥじゃなくてＬＯＶＥの方で」
「アンタ正気で言ってんの!?」
（レナとアンタが相思相愛だなんて！）
これは都合の良い夢か、或いは悪質なドッキリか。
だがレナにとってはこのどちらかであって欲しい――寧ろそうでないと自分を見失いそうだった。
だって何処まで行っても被害者と加害者の関係は覆らない筈だから。
「……急にごめん。でも、ちゃんと伝えておきたかった」
（レナは――）
レナが「あの日」飛び出さなければ少年が轢かれる事は無かったし、こうして入院する事も無かったのだ。
レナがいなければ。
レナ以外だったら。
そんな負い目がひたすらにレナを戒める。
「どのみち退院したら話す事は無くなると思うから、自分に嘘は吐きたくない」

（レナは――――！）
やはり少年は素直だった。
自分の心を隠しもしない。
そしてだからこそ絶対に頷けない。
例えこれ程急な告白でなくても、どれだけ少年が好きでも、水波レナは頷く訳にはいかないのだ。
（――――無理、よね）
この恋心は此処まで。そして憧れは憧れのままで良い。
いつものように自分に嘘を吐いて、それで帰って泣けば良いのだ。
そんな己の意思を確認したレナは、明確な拒絶を突きつける為に口を開き――――
「僕は……僕はレナが好きだ。例え出会いが交通事故でも、勉強にうるさくても、キミが大好きだ」
「はあッ――――!?」
確かめるように、噛み締めるように吐き出された告白に今度こそ自分を見失った。
この少年と恋に落ちる事だけは絶対に有り得ない。
友情までは進めても、その先は存在しない。
その前提が根底から覆される。

「嘘、嘘よ。有り得ない」
「有り得なくない。何回轢かれたって僕はキミを好きになる」
「そんなの、所詮は言葉でしょ……？」
水波レナは信じている。
自分はどうしようもない弱者で、今相対している少年こそ真の強者だと。
意気地無しの臆病者が、報われて良い筈は無いと。
「キミは……キミ自身が言うには『弱い人間』らしいけど、僕はそうは思わない。あの日見たキミの強さは本物だって、今でも信じてる」
「そんな事――ない」
少年も信じている。
自分こそ停滞したままの弱者で、今相対している少女こそ真の強者だと。
夢に向かって走れるキミが、報われない筈は無いと。
「キミが自分を肯定出来ないなら、弱い僕が肯定したい。オンリーワンでナンバーワンの水波レナだって、誰に憚る事なく言ってやりたい。以上――」
言うべき事は全て言ったと吐き捨てる少年の瞳は、やはりいつになく真剣だった。
レナだけを見詰めていた。
レナだけを想っていた。

「レナは――」
レナも少年から視線を逸らさない。
全部終わらせるなら今、この場所しかない。
そうだ、素直になったらどうなんだ。
建前を全て取っ払った先に残った本音は何なんだ。
「レナは――――」
口に出さずに、心の中で確かめる。
水波レナは己を知らない。
自分の価値にだって気付きすらしない。
だけど考えれば――いや、考えずとも最初から答えは出ていた。
それなら、後は声に出せ。
思ったように、望んだままにぶつけてしまえ。
さあ。
さあ――――
「レナは――――――!」

■■■

「いやーこれでめでたしめでたし、かな？」

病室の扉に背を預ながら十咎ももこは何処か嬉しそうに呟いた。

万事上手く行った。

ももこの想定通り、何もかもがハッピーエンドだ。

（レナには助けられてきたんだし、これ位は、ね）

後1週間程度で少年は退院するだろう、とももこは目星を付けていたが、それまでに両者が「告白する勇気」を出すとはとても思えなかった。

没個性と独りぼっち。

そんな感じで妙に自己評価が低い2人はきっとなあなあで日常生活に戻って、「自分じゃ相応しくないから」なんて下らない事を考えて身を引くに決まっている。

そんな確信めいた予感をももこは抱いていた。

「やっぱり、未練かもね……」

自分らしくない、弱々しい本音だとももこ自身も認めていた。

だがももこは魔法少女になってまで望んだ「告白する勇気」を、それでいて想い人に対して何の行動も起こせなかったあの悲しみをレナには感じて欲しくなかったのだ。

勇気を出せなかったせいで。

タイミングを逃したせいで。
そんな事で自分のように大切な友人が報われないなんて、認めたくはなかった。
「余計なお世話だったかもしれないけど、『ちょっと応援』した甲斐はあったなぁ」
握り拳の中に収まった、朱色の宝玉に視線を落とす。
業を煮やしたももこの取った手段は「激励」の固有魔法で恋心を燻らせていた少年に発破を掛ける事だった。
そして「告白する勇気」を得た少年は、勢いのまま即座に行動を起こしたのである。
何もかもがももこの思惑通りに進んだ上に、「激励」が戦闘以外でも役に立つ事があると知ったももこは相当に上機嫌だった。
（たまには、恋のキューピットなんても悪くないかも……）
そう、大分強引だった上にやり過ぎてしまったのか、展開はドラマチックに過ぎたが何はともあれ事は成ったのだ。
やはり恋愛の終着点はハッピーエンドに限る。
これで良し。万事良いのだ。
そう1人で結論付けたももこは扉から背を離し、ゆっくりと歩きだした。
が――――
『――好きよ、好き。愛してる』

「ブッフォッッッ!?」

突如扉を貫通した愛の囁きに、光の速さで踵を返していた。

ただ一言でももこの予想は天井までぶち抜かれた。

そもそもからしてももこの知る水波レナは、情熱的に愛を囁く人間ではない。

確かに「成った」のだから、好意を表現する機会だってあるだろうが、いつも通り遠回しで屈折したモノになるだろうとももこは予想していたのだ。

なのにこの状況はなんだ。

甘い、甘過ぎる。

砂糖をたっぷりまぶしたとしても、蜂蜜にどっぷり浸したとしても「こう」はなるまい。

『な、何か……凄い素直になるんだな』

『多分、今日だけ……明日になったら元に戻るわ。だから今言いたいの。感謝も、愛情も、全部全部伝えたい。ね、いいでしょ?』

(え、えぇ――っ!?レナってタガが外れるとこんな風になるのか……!)

とてもレナの声帯から出た発言とは思えない直球ド真ん中の発言に、流石のももこもたじろいだ。

あまりの甘さに如何わしい雑誌を拾ってしまったかのような、何か良からぬモノでも

聞いているような気分になってしまう。
だが「良からぬモノ」に得体の知れない魅力を感じてしまうのも、青春時代を生きる少年少女の特権である。
（こ、これは――AとかBとか全部すっ飛ばして最後まで行っちゃうんじゃ――!?）
故にももこのお節介――いや、ピーピング・トムの血が騒いでしまうのも当然の事だ。
こうなってしまえば居ても立っても居られない。
（ごめんレナ！　でも、でも――）
先程まで背中を預けていた扉にぴったりと耳を付けたももこは、衝動のままに盗み聞きを再開した。
誰も咎める者などいない。
寧ろももこ自身が咎めるべきなのだが、本来ストッパーになる筈の少女がこのザマなのだから――
（気になるよ――！）
何とも締まらない空気が里見メディカルセンターの一角に流れていた。

熱烈友情確認戦

「じゃ、いよいよ退院が決まったってワケ？」

いつも通りの病室――ではなく、里見メディカルセンターの屋上庭園で水波レナは問い掛けた。

成る程、確かに少年の両足はしっかりと芝生を踏みしめているし、ともすれば走り出す事すら可能に思える。

健康体そのものなのだから、退院するのは当然の事だった。

「うん、3日後にはこの病院からもおさらばだ。まだ激しい運動とかはダメって言われたけどね」

「そう……支度は早めにしときなさい、アンタ鈍臭いんだから」

「善処しまーす」

つい2日前、少年とレナはめでたく交際を始めた訳だが、だからと言って明確な関係性の変化が発生したりはしなかった。

今だって普段通りの、中身があるようで無い会話をうだうだと垂れ流しているだけである。

現に少年がギリギリにならないと行動を起こさない事も、レナの忠告が「親切心」に分類される事も互いに理解していたが、だからと言って止めようとはしない。
「あー、学校ダルいなぁ。行きたくねぇ」
「アンタね、いくら入院してたからって弛み過ぎでしょ」
「違いない……」
これでは恋人の――と言うよりは世話焼きオカンとグータラ息子の会話だ。
甘酸っぱさも何もありゃしない。
実の所、告白当初こそは初々しいカップルの様相を呈していたものの、翌日になればレナは例の仏頂面に戻っていたし、少年の熱情もすっかり鳴りを潜めてしまったのだ。
しかし少年少女の言葉に嘘はないし、だからと言ってそこに深い理由がある訳でもない。
「レナのか、かかかか彼氏としてそんなの認めらんないわ！もっとシャキっとしなさいよ！」
「そんなどもる位なら言わなきゃ良いのに……」
「うっさい！」
そう、単に恥ずかしがっているだけなのだ。
「何回轢かれたって僕はキミを好きになる」なんてあまりにもキザ過ぎる、と少年は猛省

した。

「感謝も、愛情も、全部全部伝えたい」なんてあまりにも気色悪過ぎる、とレナは煩悶した。

故に告白の瞬間は2人にとって最高に幸せな記憶であるが、同時に最大限封印したい記憶でもあるのだ。

そして「らしくない自分」を記憶から抹消すべく、2人は何事も無かったように――しかし以前とは決定的に違う普段通りへと移行した。

まあ結果は御覧の通り大失敗だが。

「まぁ、レナのお陰で授業に置いてかれる心配は無さそうだ。ありがと」

「……別に。レナは何もしてないし、アンタがちゃんと勉強したからでしょ」

「それもレナが見ててくれたからじゃん？」

「そう、かな」

「そうだよ」

言葉に力を込めて強く肯定する。

やはりと言うべきか、レナの自己評価は異常なまでに低い。

殻に籠ってきた代償はそう簡単に支払えるモノではなく、自分を卑下する癖があっさり治る訳でも無いと言うことだ。

そして、その「自信」の欠如が今のレナに深刻な問題をもたらしていた。
態々少年を引っ張って屋上庭園まで来たのも、病室では息の詰まりそうな話が控えているからである。
「それで、その……やっぱり秋野さんとは上手くいってないの？」
「うん……」
少年が聞く所によれば、レナは最近新しくチームに加入した魔法少女――秋野かえでと事ある毎に衝突を繰り返しているらしい。
どうにかしてやりたいと思いこそすれど少年と秋野かえでに交遊は無く、そもそも学年が違うのだから面識すら無い。
そして面白半分、お節介半分で現れるももこと違ってかえでは見舞いに来る理由も無いので、少年に出来るのはひたすらレナの愚痴を聞く事だけだった。
「別に……かえでが悪いって訳じゃないの。オドオドしてるのにはムカつくけど、それに助けられる事だってある」
「そっか……」
「なのにレナがすぐカッとなって、後は売り言葉に買い言葉って感じ」
実際かえでが加入した事で、戦闘その物はとても円滑になったのだとレナは語る。
良くも悪くも突っ込んで蹴散らす事しか出来ないももこと、戦い方そのものは変幻自

在だが視野が狭くなりがちなレナにとって、臆病とも取れる程慎重なかえでの目線は大きな助けとなっていた。

それはレナ自身よく理解しているが、その上で礼の1つも言えずに喧嘩を吹っ掛けてしまう自分が現実として存在するのだ。

どうにかしたくて、しかしどうにも出来ない。

そんな苦悩から、以前よりレナは少年に相談を持ち掛けていた。

「やっぱりこのままは嫌。アンタの力――は無理ね。知恵を貸して」

「そりゃ勿論、彼氏だからね。そんでもって既に1つ考えがあるけど、聞いてく？」

「うん、聞かせて」

「彼氏」の一言はこっ恥ずかしくなるので余計だったが、その言葉がレナにはたまらなく嬉しかった。

少年はレナの人生で初めての心置きなく相談出来る相手であり、数少ない棘だらけの殻に閉じ籠って怯える必要の無い人間なのだ。

「彼氏、彼氏ね……ふふっ」

「何？」

「――何でも無いわ」

――――そして最も愛する、男の子でもある。

■■■

――等と考えていたが。

「ホンット有り得ないんだけど……！」

「レ、レナちゃん落ち着いて……」

気が付くとレナはファミレスで管を巻く羽目になっていた。

しかも対面に怯えるかえでを着席させて、である。

何故こうなった。

思い返して、その原因にまた腹が立つ。

そうだ、それもこれも全部あの少年が悪い。

少年があんな事を言わなければ、こんな所でちびちびとジュースを飲みながら愚痴を言う必要性等ありもしなかったのだ。

そう――――

「なぁにが『レナの胸って中学生とは思えない位デカいよな』よ！あの変態！」

「ふ、ふゆぅ……」

感情のまま振り下ろした拳がテーブルに衝突して硬い音を立て、かえでがびくりと震える。

マナー的にも人としても良くないと理解していたが怒りを収えられず、そんな己の幼稚さにもレナは苛立っていた。

少年の策は実に単純なモノだった。

レナとかえでがマトモに会話出来ないのは趣味嗜好が大きく異なるからであり、それなら共通の話題を作り出してしまえば良いし、ついでにガールズトークに使えるネタを一緒に考えてしまおう――――そこまでは順調だったのだ。

が、その「ネタ」として少年が引っ張り出したのがレナの胸の話だったのである。

『デカい、超デカいよ。母性の塊だよ』

『はぁッ!?』

『一体何食ったらそんなデカくなるんすかね。きっとその件で泣いてる女性も多いだろうし、是非教えて欲しいなぁ』

『な、あ、へぁ……?』

レナ自身とて恋人からの評価は大いに気になっていたが、よもやこんな形で聞く羽目になるとは思いもしなかった。

しかも最低だ。
セクハラ２００％だ。
思春期の少女なら誰でも夢見る「甘い」理想がこの犯罪的発言で木っ端微塵になってしまった事に、哀しみを隠せる筈も無い。
「変態！変態ッ！ああもう信じらんない！男って皆あんな変態なの!?しかもよりにもよって『顔を埋めてみたい』とかぁ！あ、あああ有り得ないんだけどぉ！」
「レ、レナちゃん、一旦落ち着こうよ……」
「これが落ち着けるワケ無いでしょうが！」
「うひぃ！」
それだけならまだしも、何だって中学生の口からこんな中年エロオヤジみたいな言葉が飛び出してくるのか。
あ、でもでもやっぱり容姿を褒められて何だか悪くない気がしたりしなかったり。
そんな何とも言えない気分を抱えたまま顔を真っ赤にして病室を飛び出したレナは、モヤモヤを解消すべくももことかえでを召集したのだが――
「それで！ゲーセン行ってもモヤモヤしたまんまだしッ！ももこに電話しても出ないしッ！ああもうイライラする！」
「レ、レナちゃん……」

「アイツもアイツで何が『秋野さんとの円満なコミュニケーションの為に』よ、ふざけんじゃないわ！あの変態！変態中学生！」
「レナちゃん！」
「何よ!?」
「それを私に言っちゃったら意味ないんじゃ……」
「――――――――ぇあ？」
沈黙。
表情を凍り付かせたレナはかえでの言葉をたっぷり１０秒かけて咀嚼し、ようやくその意味を理解した。
「……口に出てた？」
「うん。って言うか彼氏さんいたんだね、今初めて知ったよ……」
「……言ってなかった？」
「うん……」
再び沈黙。
確かにレナは交際関係について何も言っていなかった。
どうせももこは勘づいているのだろうが、だからと言って具体的に言葉を交わした事も無い。

だがそれは浮かれてたからだとか、会う機会が無かったから――ではない。
「……悪い？」
「え？」
「レナに付き合ってる人がいたら悪いのかって訊いてんの」
そう、それは優越感と独占欲だった。
昔から均一である事、同調する事が求められる社会に在って、その性格が災いして馴染めなかったレナは己に劣等感（諦念）を抱いていた。
それは今も変わらず拭う事すら出来ない呪いであり、レナが「強さ」を求める理由の1つでもある。
だが、この数日でレナの人生は一変したのだ。
恋を知った。
愛を知った。
たった1人の冴えない少年によって「変われるかもしれない」と思える自分を知った。
希望と――――恐怖を抱いた。
「悪くは、ないけど……」
「ないけど、何よ」
「な、何って……なんでそんなに怒ってるの……？」

「怒ってる？レナが？まさか――――まさか。寧ろ怖い位よ」
少年がいるから変われる可能性を得た。
少年に愛を吐露したから素直な自分を知った。
だが、もしそれが奪われたら？
少年はレナに夢中だが、レナ自身はいつまでも少年と繋がっていられる確信を持てないのだ。
だってレナより情熱的な人間は沢山いるから。
レナより魅力的な人だって――――
「ももこの優しさが羨ましい、かえでの慎重さが妬ましい。そのどちらかでもレナにあれば、こんな思いをする事も無いのに」
「そんな事……！レナちゃんにはレナちゃんの良い所が――――」
「確かに、かえでの言う通りあるのかもね。けどそれじゃ足りないの」
やっと手に入れた安寧を、喉から手が出る程欲しかった「オンリーワン」を他人に奪われたくない。
友達だとしても――――いや友達だからこそ恐れている。
「かえではレナの友達よね――――？」
「――――ひぃ」

秋野かえでは心の底から恐怖した。
ほんの数日前までのレナとは根底が違う。
あの無愛想、不器用で、それでも隠しきれない優しさが滲み出る水波レナは何処へ行ってしまったのか。
或いは彼氏と言うのはここまで人間を変えてしまうモノなのか。
「どうなの？」
「う、ゆ――――」
何を言えば良いのか。
どう答えれば良いのか。
正解なんて分かる訳が無い。
それでも何か言おうと口を開いて――――
「なーんちゃって☆中々良い演技だったでしょ！」
「……へあ？」

■■■

「むぅぅぅぅぅ……！」
「ごめん、ごめんってば。今度クレーンゲームで欲しいの取ったげるから機嫌直しなさいよ……」
「レナちゃんの意地悪……わ、私ホントに怖かったんだよ……！」
「し、仕方ないじゃない。何かやってる内に興が乗って来ちゃって……ね？分かるでしょ？」
「うゆぅぅぅぅぅ！」
机に突っ伏したかえでの、怨嗟の呻きがファミレスの喧騒にこだまする。
実に迷惑千万だが、２人とも周りを気にしている余裕等無い。
付け加えるならば先程とは逆に「不機嫌な様子を醸し出すかえでとあたふたするレナ」の構図であり、完全に攻守が逆転していた。
「いや、ホラ、アイツも言ってたのよ。『普段とのギャップを狙ってみれば良いかもしれないよ』って」
「ギャップで……ギャップでごんな事ずるのぉ!?」

「うん、だからゴメンって……」
「うううううう！」
必死の弁解を試みるが、今のかえでに何を言っても逆効果なのは目に見えていた。
確かに、前提からして色々と可笑しかったのだ。
ギャップがどうとか以前に素直に話したい相手を怖がらせたら元も子も無いし、その内容にしたってかえでからすれば完全にお門違いだろう。
つまり、少年の献策は的外れも良い所だったワケで、レナも恥をかく羽目になってしまったのである。
これは有罪だ。罰が必要だ。
明日はプリン買って行くの止めよ、と細やかな復讐をレナは己に誓った。
「そのままで良いから、ちょっと話を聞いて――ううん、聞きなさい」
「う――――？」
――とは言え、レナには言って置かねばならない事がある。
例え自爆でかえでを怒らせてしまったとしても、相手が突っ伏したままだとしても、これを伝えなければ始まらない。
「まぁその、さっき言ってた事、１００％嘘って訳じゃないのよ」
「――」

「やっぱりももこもかえでも、レナには無い『強さ』を持ってる。物理的なモノじゃなくて、心の『強さ』がアンタにはあるのよ」

「――」

「その『強さ』がレナは羨ましい。そしてそれが原因で2人を妬む事もあるだろうし、心にも無い事を言っちゃうかもしれない。それでも――」

ちょっと前までは其処で「行き止まり」だった。

全部全部諦めていた。

けれど、今はそれだけでは無い筈だ。

水波レナは「変われる」事を知ったから。

殻に閉じ籠るばかりでは得られなかった他人の温かみを知ったから。

だから――――

「それでもレナはアンタと一緒にいたい。下らない事で騒いで、一緒にゲーセン行って、一緒に魔女退治をする。そんな仲間のままでいたい」

「――」

「自分の悪い癖だってそのままにしたりもしない。アイツに誓った通り、言いたい事は言えるようになってみせるわ。だから、その――――」

「レナと友達で、いてくれる？」
水波レナは自分のまま変わる、その最初の１歩を踏み出した。

■■■

時刻は午後９時を回っており、里見メディカルセンターは夜の静けさに沈んでいた。
患者の幾らかはもう寝ている頃だし、そうでないにしたって出歩く人は多くない。
――だが、そうでない人間もいる。
「――うん？」
急に、と言えば良いのか。
或いは最初からそうだったのか。
だが兎に角、少年は突如として猛烈な違和感を覚えた。
何かがおかしい。
あと数日でおさらばする筈の、代わり映えのしない病室に「何か」が紛れ込んでいる。
直感で悟った少年は、取り敢えず棚の中身を掻き出す事から探索を始めた。
「うぅん……？」

備え付けられた物品の位置が変わった――違う。
在るべき物は在るべき場所に、普段通り鎮座している。
ベッドの下に誰かが隠れている――違う。
レナにしろういにしろ、そう言う事をする人間ではない。
医療機器の裏側を覗いても、棚と言う棚を空にしても、違和感の根源が見付からない。
そうして２０分程私物を撒き散らした末に、ようやく少年はそれを発見した。
「ニリンソウ？誰が……」
つい先程までアヤメの紫で彩られていた窓際のアレンジメントに、小さな白い花が添えられている。
誰が挿したのか。
何故挿したのか。
少年は知る由も無かったが、１輪の花は雄弁に語っていた。
そう、ニリンソウの花言葉は――

「――――――ひょっとしてレナ、か？」

ずっと離れない

強襲突撃超登校

「……僕の部屋じゃん」

その日は「いつも」と同じで――いや、あるべき「いつも」に回帰してから初めての朝だった。

退院したのはつい昨日の事だって言うのに、どうにも現実味がない。

そりゃレナは来てくれたさ。

態々秋野さんと選んだらしい花束まで持ってきてくれて、慣れない笑顔まで作って「退院おめでとう」なんて言ってくれたら誰だって幸せだろう。

それだけじゃなくて、ういちゃんとねむちゃんと灯花（文系の敵）だって見送りに来てくれたんだから文句なんてある筈も無い。

――ただ、2ヶ月と言う時間は僕にとって長過ぎたんだ。

病室のベッドで目を覚まして、リハビリに励んで、それで午後になったらやって来るレナと会話を重ねて、たまにういちゃん達の所へ遊びに行く。

それはこれまで積み上げてきた無意味な十何年より、ずっとずっと充実した2ヶ月だった。

病院は退屈で閉鎖的な場所だと思い込んでたけど、療養生活は刺激的で、開放的で、とっても楽しかった。

そして気付かぬ内にそれが僕の「いつも」になっていたんだ。

それは本来の「いつも」と非日常が逆転してしまって、戻るべき日常に違和感を覚える事でもある。

たしかに、2ヶ月振りに自宅で食べる夕食は病院食より断然美味かった。

2ヶ月振りのベッドは柔らかいし広かった。

だけど、何かが違う。

修学旅行で興奮して寝付けないとか、枕が変わると眠れないとか、そういう類いの妙な気分になってしまったのである。

と、ここまで長々と語ってしまったが問題はもっと単純明快だ。

要するに――――――

「朝ってのは二度寝するモノなんじゃないか？」

「何言ってんのアンタ。早く起きなさい」

僕の渾身の説得は、ベッド脇で仁王立ちしているレナによってばっさり切り捨てられ

た。

何でだ。

朝ベッドに潜ってる事の何が悪いって言うんだ。

ベッドでぬくぬくするのは人の夢だろ？

「……まだ７時半だよ？」

『まだ』、じゃなくて『もう』が正解でしょ」

ああそうさ、『もう』７時半だ。

しかし９時までに登校すれば良いんだから、後３０分は寝ていられるじゃないか。

いくらレナとは言え僕の睡眠を邪魔出来るとは――――あれ？

「レナが、僕の家に来てる？」

「そうだけど、何か文句あんの？」

レナが、来てる。

僕の家に。

――なんで？

「……いや、無いけど、鍵は？」

「アンタの母親から借りたわ」

「へえ――――えぇ？」

全く整理が追い付かない。
追い付かないが、これはアレか。
レナが朝っぱらから僕の家に来てくれて、僕を起こしに来てくれて、そんでもって何かリビングから良い匂いがするし朝食まで用意してくれてるって事か？
「だったら寝てる場合じゃねぇ！」
「うるっさい！朝から騒ぎ立てんじゃないわよ！」
「そうだね、着替えてるからリビングで待ってて！」
「はいはい。なんで朝からこんなテンションなのコイツ……」
レナの怒りもご尤もだ。
しかし、彼女がモーニングコールに来てくれるとかって言うのは全男子の夢であり、それが現実となったのだからもはや寝ている場合ではない。
起床はするし、身嗜みを整えるのだって１０分以内に済ませてもみせる。
そうやって自分史上稀に見る位キビキビと登校の支度を終えてリビングに向かえば、レナは緑茶を啜って待っていたし、配膳とかももう済んでいてそういう所にレナの優しさが光っていた。
「レナはもう食べてきたから、さっさとしなさいよ」
「うん、分かった」

そして父さんと母さんは――やはりいない。
共働きで忙しいから、毎日1人で冷めた飯をつつくのが僕の日常だったんだ。
それが覆しようの無い現実だって、やりきれないけど諦めてた。
だけど今はもう違う。
対面には、不器用で無愛想だけど誰よりも優しい彼女がいる。
レナと一緒に、会話のある朝食を摂る事が出来る。
手と手を合わせて、「頂きます」って言えば――――

「……めしあがれ？」
ほら、言葉が返ってくるんだよ。
望んで望んで、ようやく得られた満足の形が此処にある。
凡人の僕でも、勇気を出せば変われるんだ。
それに気付けたらもう、幸せだろう。

それにしても、本日の献立は――
目玉焼き！お浸し！白米！
味噌汁の具には人参と大根あり！

空きっ腹にはどれも宝石が如く映るが、レナが作ったのなら尚の事。
迅速に、米一粒残さず完食すべし。
……なんだこれ、やっぱレナが来たせいで今日テンションおかしいな。

■■■

「……雨、降ってたんだ」
「気付いてなかったの？」
「うん」
成る程、自宅から――新西区にありがちなごく普通の一軒家から踏み出してみれば、濡れた路地が朝陽を反射して鈍く輝いている。
何だかんだ言って久方ぶりのベッドを楽しんだ少年は気付かなかったが、深夜の内に幾らかパラついていたらしい。
両手を突き上げ伸びをする少年とは対照的に、レナはいつも通りの素っ気ない表情のまま詰問を始める。
「ちょっと鈍すぎない？人間が皆アンタ程呑気なら魔女につけこまれる事も無いでしょうに……」

「そんなにかな？」
「そんなによ――ちょっと、小学生じゃないんだから変な事するのは止めて」
「はぁい」
すっかり回復した足でアスファルトの破片を蹴りあげれば、隣を歩く少女が鬱陶しげに顔をしかめる。
特に語るべき事も無い、学生にとってはありふれた登校の風景だった。
ただ他者と異なる点があるとすれば、それは「この少年少女が恋人同士である」という一点に尽きる。
しかしこの事実が、２人にとって何よりも重要なのだ。
まさにオンリーワンにして、ナンバーワン。
恋愛とくれば誰もが色めき立つ年頃に於いて、彼らの想像より1歩先へと進んだ関係が少年とレナの間には存在している。
だから例えくだらない会話でも、２人並んで歩くだけで少年とレナは満ち足りていた。
そして満ち足りているからこそ――そういう話題にもなる。
「魔女ってさ、やっぱりいるんだよな」
「急に何よ。疑ってんの？」

ポツリ、と少年が言葉を漏らした。
登校途中としても、カップルの会話としても、この上なく不適切な話題だったが少年は聞かずにはいられなかった。
神浜には魔女と言う名の異形が巣食っている。
少女達を魔法少女に誘う、キュゥべえとやらもいる。
そんなヤツらが跋扈する日常に、幸せな現実を奪われるのではないか。
そんな情動を上手く処理出来ぬまま口を動かし、少年は言葉を紡ぐ。
「いや、レナが『いる』って言うんだから信じるよ。ただ、どんなヤツらなのか僕には想像もつかないんだ」
「……ロクなもんじゃないわ。普通に生きてるだけの人を殺して回る、化け物みたいなヤツらよ」
「ふぅん……大丈夫なの？」
それは興味というより心配、そして恐怖だった。
そう、少年は知っている。レナが切実な願いから魔法少女になったことを。そしてレナが魔女の存在に見て見ぬ振りを出来ない優しい少女であることを。
だからレナが戦う事を止めようとは思わなかったし、病院で見送るだけの自分に納得もしていた。

だが、不安は拭えない。
何しろこの世界に「絶対」は無い。
少年とレナに接点が生まれたあの事故のように、些細な事から人は死に近づいてしまうのだ。
「レナが負けるって？」
「そうは言わないけど、人命が賭かってるんでしょ？やっぱり心配だよ……」
その生死の危機が頻繁に訪れる日常など、高々中学3年生が身を置くべき世界ではないのだ。
少年の懸念は尤もだった。
「悔しいけど、僕は何も出来ないから……」
固く握られた拳を震わせ、少年は無念を吐き出した。
今、少年はどうしようもない無力感に苛まれているのだ。
レナが怪我をしてしまうかもしれない。
レナが死んでしまうかもしれない。
何より少年にとって1番恐ろしいのは、レナの窮地にもう1度身を投げ出す事すら出来ない現状だ。
無理に明るく振る舞おうともしたが、やはり取り繕っておけるモノではなかったの

だ。
　レナは変われたのに、自分は停滞したまま――その認識が存在する限り、少年の空元気は終われない。
　唇を噛み締めて、精一杯強がらなければいけない。
「なーに言ってんのよ」
「へ？――う〝っ!?」
　――だが。
　鬱屈とした空気を打ち払うように、レナは少年の背中を勢い良く叩き付けた。
　1回、2回、3回と背後に回ったレナの手のひらが凝り固まった少年に喝を入れる。
「な〝っ、でっ、ぐぇっ、ちょっ、ちょっとま〝っ――――」
「大体ね、神浜でレナが負けるワケ無いじゃない」
「え？」
　少年の背中をビシバシと叩きながら、水色少女は自信満々に言い切った。
　そう、どれだけ相手が強大でも、悪辣でも絶対に負けないという確証が其処にある。
　魔女と戦った経験の無い少年は知らないだろうが、理由だって最初から分かりきっている事だ。
「ももこがいて、かえでがいる。1人なら無理でもチームだったら有象無象には負けな

いわ」
「そりゃあまあ、そうなんだろうけど」
ももこの突貫力。
かえでの支援力。
レナの遊撃力。
なるほど、その3つが合わされば敵う相手等殆どいないだろう。
「んでもってアンタがいる」
「僕？」
そして、水波レナには負けられない理由がある。
それは「今の」レナが最も恐れる事態だ。
「もし、万が一にもアンタが魔女に殺されるような事があったらレナはきっと……一生後悔する」
何しろこの世界に絶対は無い。
魔女という人間の尺度で行動を推測出来ない化け物が、いつ身近な人間を傷付けるかなど誰にも分かりはしないのだ。
少年がレナを思い遣るように、レナもまた少年の身を案じているのだ。
「だからレナは無敵。無敵でいなきゃいけないの」

「それは……重荷になってるんじゃないの？」
「かもね」
「だったら――」
「でも、それで良いの」
今しがたまで少年へ振り下ろしていた手をぐっと握り締め、レナは言葉を絞り出す。
自戒を、決意を、ありったけの想いを乗せて少年とレナ自身を奮い起たせる。
「今まで自分の事しか考えてなかったレナを、ようやく辞められる。初めて心の底から誰かの為に戦える」
「そう思えた切欠はアンタよ」
「だからアンタは重荷じゃないし、どうしても重荷だって譲らないならどこまででも背負ってみせる」
少年がどれだけレナを愛していても、魔法少女の代わりは務まらない。
レナがどれだけ少年を慮っても、心の傷を代わってやる事は不可能だ。
人の痛みはその人だけのモノ。
しかし、それは支え合えない事の証明にはならないのだ。
「ま、要するにアンタは自分が思ってる程『何も出来ない人間』じゃないって事よ。もっとシャキッとしなさい」

「……なんだそりゃ」
少女の論理は無軌道で、滅茶苦茶で、馬鹿げてる位に楽観的な代物だった。
だけど――――悪くない。
「分かった、信じるよ。レナは負けない」
「そう、それで良いの。アンタがウジウジしてるのは似合わないしね」
根拠なんて1つも無いけど、レナの言葉なら信じられる。
そんな気がした。

「ありがとう、元気で――ちょっと待って何すんの」
「は？何が？」
元気が出てきた。
そう伝えようとして少年は振り向く――事が出来ずに頭を万力のような力が籠った両手で固定された。
魔法少女の力だ。
レナは魔法少女の力を行使してまで少年を拘束している。
無敵はどうした無敵は。
「いや、後ろ向けないんだけど」

「向かなくて良い」
「何でさ。お礼はちゃんと目を合わせてするモンでしょ」
「動いたらアンタの頭が爆ぜるわ」
「何で!?」
少年は困惑した。
何故レナは魔法少女の力を行使してまで振り向く事を許さないのか。
彼女の言葉から類推するに、どうにもレナは「目を合わせたくない」らしい。
「……!」
「な、何よ……」
少年は気付いた。
天啓も何も無しに、いっそレナが可哀想な程あっさりと気付いてしまった。
そう、カップルが目を合わせない理由として考えられるのは2つしかない。
1つは喧嘩をして不和が発生した時。
そしてもう1つは――――
「……レナ、照れてる?」
「照れてない!」
レナは魂から絶叫した。

どうしたって自分の醜態を認められないし、認めたくないのだ。
人を励ました位で照れるなんてそんな事は有り得ないと全身全霊で否定するが、寧ろそれが逆効果である事にレナは気付いていない。
「あぁ……朝っぱらから見せ付けてくれるねぇ……」
「ねーおかーさん！あの人たち好きあってるのー？」
「シッ！今良い所なんだから少し静かにしなさい」
大体、こんな住宅街のド真ん中でバカみたいに叫んだってどうにかなる話では無いのだ。
それどころか道行く人々に何とも生暖かい視線を送られる始末である。
「いや、照れてるじゃん」
「照れてないって言ってんの！」
「なぁんでさ！照れてないなら顔くらい見せられるだろ！」
「……無理！兎に角無理！このまま校門まで行ってもらうから！」
あまりにも無茶苦茶過ぎる宣言を行うなり、レナは少年をグイグイと押し始めた。
しかしレナと少年の間には２０ｃｍ近い身長差があるのだから、魔法少女の力を発揮したとて人を「押す」のは簡単な話ではない。
故にレナは全身を用いて、半ば体当たりの様な形で少年を押し出そうとしたのだが―

「レナ、レナ」
「何よ」
「えと、その、当たってる」
「え――――」
当たっていた。
完全無欠に当たっていた。
エントロピーを凌駕するような、思春期少年の希望がパンパンに詰まったそれが背中に押し当てられていたのだ。
そしてそれを伝えた時どうなるのか、少年はしっかりと理解していた。

「変ッッッ態!!!」
衝撃の暴露からきっかり5秒後、少年の頬に季節外れの紅葉が散った。

理想構想狂想曲

多項式が分からない。
何故折角綺麗に纏まっているモノを分解してしまうのか。
て言うか展開と分解って似たようなモンじゃないのか。
開いたりバラバラにしたんだからちゃんと元に戻せよ。
序でに言ってしまえば平方根も分からない。
気軽に根っこを伸ばすんじゃない。
いやそれより√って何なんだよヒロイン気取りかよお前。
心電図ドキドキしてんのか。
それともアレか、不整脈か。
まあ、端的に表現すると数学はクソであると言う話だ。
確証を持って断言出来る。
もうマジで全くもって、動く点Pの存在意義並に価値を理解出来ない。
しかしながらその不要な学問とも向き合わなければいけないのが学生であるし、実際僕は向き合った。

故に。
故にだ。
僕は――――――

「赤点回避したぜ！」
「当たり前じゃない」
「おー、おめでとー」
机に腰掛けたレナの冷たい視線と弁当箱を膝に置いたももこさんの適当極まりない拍手を全身で浴びつつ、僕は1人勝ち誇った。
退院した直後にぶち当たった中間試験を死に物狂いで乗り越えたんだから、正直もっと盛り上がって欲しい。
「……何か冷めてない？」
「いや、寧ろあれだけやって赤点ギリギリってのが異常よ」
「病院では毎日仲睦まじくやってたもんなぁ。それでもギリギリってさぁ……」
なるほど、言われてみればそうかもしれない。
実際の所英語だとか古文だとかは何ともないのだが、数学は悲惨以外の言葉で表現し

ようがなかった。

何しろ我等が神浜市立大附属中の赤点ラインが４０点で、僕は４３点だ。

もう1問でも落としていれば赤点は免れない訳で、努力に対して結果が釣り合っていないと言われればぐうの音も出ない。

「だけどさ、赤点かそうじゃないかの差は大きいよ。それは補習があるか無いかって話でもあるんだし」

「レベルが低いって言ってんの」

「いや、まぁ、はい……」

「何か文句あんの？」

「無いです……」

精一杯の抵抗も敢えなく切り捨てられてしまった。

これに関しては点数が低い僕が悪いのであって、レナの文句には正当性しかないのだからこれ以上は止めておこう。

――それよりも、気になる事がある。

「ももこさんがこんな所に来るなんて珍しいね」

「あー、まぁちょっとね。レナに相談があって……」

ここ神浜市立大附属中学の屋上は、大体の学校と同様に立ち入り禁止となっている。

加えて廃棄予定の机や椅子が乱雑に積まれているせいで思ったより広くない事もあって、学生生活エンジョイ勢ならまず来ない。
５０分しかない昼休みを態々此処で潰す人間がいるとしたら、それは余程の物好きか変人だろう。
……まぁ、僕やレナはその物好きと変人にカウントされてしまうのだが。
そして当然ながらももこさんが来る事もあんまり無いワケで、だからこそ今この場で弁当を掻き込んでいるのは相当珍しい光景と言える。
それにしても、ももこさんが相談か。
それも屋上まで来て。
とすると、ひょっとして魔法少女絡みだろうか。
「えーっと、僕は聞かない方が良いかな」
「いや、別に？魔法少女の事はもう知ってるんだし、それに今回は色々特殊でさぁ。魔法少女じゃない人からはどう見えるかって訊きたかったんだ」
なるほど、だから秋野さんじゃなくてレナの所に来たのか。
確かにももこさんには告白の1件で助けられているし、可能ならば力になってあげたいけど――ただの中学生でしかない僕に何が出来るんだ？
レナもその辺りが気になったようで、机から投げ出した足をブラブラさせながら口を

開く。
「それで？何があったってのよ」
「ああ、それがな――キュゥべえがいないんだよ、神浜の何処にも」
「キュゥべえが？」
キュゥべえ――確かに「いる」のに、魔法少女になる資格を持つ者にしか見えない動物。
前にレナが絵に描いて見せてくれたけどソイツは猫みたいな、或いは狸みたいな外見をしたヘンな「何か」として僕の目に写った。
マスコットと言うべきか。
兎に角、絵だと言う事を踏まえても生き物っぽくないのだ。
「ホントに何処にもいないの？」
「うん。東も西も探し回ってるけど、未だに見つからないみたいだ。……レナは見てないよな」
「当たり前じゃない。色々動いてるももこが見てないのにレナが見てる訳ないでしょ」
「そりゃそうか……」
レナとももこさんがそろって溜め息を吐く。
まぁ確かに、どこかキナ臭いモノがある。

キュウベえは契約を持ち掛ける癖に戦いでは一切役に立たないが、それでもアドバイスだとか相談に乗ったりだとかはしてくれるらしいのだ。
そんなヤツが突然いなくなったら、誰だって不安だろう。
「そこでぇ、魔法少女じゃない彼氏クンに質問良いか？」
「か、『彼氏クン』って何よ!?大体コイツは私の彼――」
「はい！何でもどうぞ！」
「アンタも乗るんじゃないわよ！」
レナが目尻を吊り上げて何か言っているが、今は聞く耳持たないね。
折角試験を終えて清々しい気分だってのに、こんな重っ苦しい空気じゃやっていられない。
それに、雰囲気だけでも明るい方が話は進めやすい筈だ。
「おぉ良い返事。んじゃあ早速訊くけど、この1件についてどう思う？」
「どう、とは？」
「何でも良いよ、悲しかったとかそれ位でも感想が欲しい。彼氏クンからは今の状況がどんな風に見えるか知りたいんだ」
「うーん……」
どう、と聞かれても反応に困る。

僕にキュゥべえは見えないのだから面識だって無いし、いなくなった事で具体的にどう言った問題が発生しているのかも知らない。

ただ、1つ言いたい事があるとすれば――――

「まぁ、無責任なヤツだなって」

「無責任？」

「レナやももこさんを魔法少女に誘って、魔女と戦う使命を課した張本人が何も言わずにどっか行っちゃったんでしょ？無責任だよそんなの」

「……そう考えた事は無かったなぁ」

「男の子的な発想かもしれないけどね。でもキュゥべえが社会人だったらクビになってるわ絶対」

「はは……クビか」

そうさ、無責任にも程がある。

1度関わったのなら最後までちゃんとやるって、それは子供にだって分かる事だ。

キュゥべえが如何なる生き物であろうと、人の言葉を話す知能があって人を魔法少女にするだけの力があるんだからその程度の事が理解出来ないとは言わせない。

あぁ、何だか考えてたらムカムカしてきた。

「見付けたら取り敢えず1発ぶん殴ってやりたいよ」

「そこまで言うか……？」
「勿論。魔法少女に関しては僕は傍観者未満だからね。キュゥべえがレナのサポートをしないって言うなら、僕が代わってやりたいね」
「え、代わるのか」
「それなら直接じゃないけど、レナと一緒に戦えるだろ」
「……」
「……」
「え、僕何か変な事言った？」
沈黙。
何でかレナももこさんも顔を赤くして黙り込んでいる。
いや、一体何なんだよ。
状況がよく分からないのでそのまま佇む事１０秒、レナの腕が神速で僕の襟を掴んで――引き寄せる。
碧色の瞳が至近距離に煌めき、少しドキッとしてしまった。
「あ、あああアンタ何言ってんの!?ももこ！今話してる相手がももこなの分かんない!?」
「いや分かるけど」
「はぁ!?分かってて何でそんな事言うのよ!?」

「レナが心配だから」
「――――――へぁ？」
レナが逆再生したみたいに着席して、再び黙り込む。
今度は林檎みたいに顔を真っ赤にしているけど、ももこさんに言う事の何が問題だって言うんだ。
……て言うか、何でももこさんまで真っ赤になってるんだよ。
「いや、その、なんだ。そんないきなり惚気られるとは思わなくて……」
「……惚気？」
惚気。
僕が、レナに。
してたか。いや、してな――して――
「してるわコレ」
「でしょ？まったく、お熱い事で」
ゆっくり思い返して、ようやく理解した。
何が「レナと一緒に戦えるでしょ」だ。
クサい。クサ過ぎる。あまりにも気色悪いから消臭剤撒きたいレベルですらある。
そりゃあいきなりこんな事言われたら、レナだって閉口するだろう。

しかし何か得るモノがあったのか、ももこさんは膝を打つと勢い良く立ち上がった。
「いやまあでも、そうだな。取り敢えずキュゥべえを見付けないと何も始まらないもんな。よぅし、聞く事聞けてスッキリしたしもっと惚気話を教えて貰おうか！」
「止めッ……止めなさいももこ！」
「えーっと、じゃあ付き合ってるのを見られるのが恥ずかしいからってレナが変身してデートした時とか――」
「アンタも乗るんじゃない！」
癇癪玉と化したレナに、にやにやしながら耳を傾けるももこさん。
僕にも友達はいたけど、こんなに馬鹿をやれるのは初めてだ。
「……はは」
何て言うか――もっとこうしていたい。
午後の授業を全部サボってただ喋ってるのも悪くないかなぁ、なんて。
そう、この15年間殆ど無為に過ごしてきたけどようやく生き甲斐を見付けられた気がする。
こんな無気力人間を育ててくれた父さん、母さんには申し訳ないけど――
「今が1番幸せだなぁ……」

僕の気持ちと同じ位、馬鹿みたいに晴れた空を見上げて呟いた。

■■■

春から夏にかけて、陽が出ている時間が段々増えていくのがレナは嫌いだった。
日中、それは即ちどうしても他者と関わりを持たなければいけない時間である。
故に自分が他人を傷付け、他人に傷付けられる事に怯える時間が延びるような気がして暗澹としていたのだ。
――が、しかし最近はそうでもない。
「あー、やっぱ此処のプリン旨いわ。満たされる……」
「アンタ本当に目が無いのね……」
「良いだろ別に。数学の対価には甘い菓子が必要なんだよ」
少年とレナは行き付けのカフェ「木漏れ日の小屋」の片隅でクリームブリュレをつついていた。
時刻は午後5時を回り、陽が傾き始めている。
レナはこの少し遅めの間食が好きだった――いや、好きになった。
「いやしかし、毎回付き合わせてごめんね……」

「別に。レナも此処のプリンとか嫌いじゃないし」
嘘だ。
いや、別にプリンが嫌いという訳ではないのだが、それはレナにとって建前の1つでしかない。
大体クリームブリュレはプリンと似て非なる食べ物なのだから、この話題とは無関係だ。
「それ」を知られるのが少し恥ずかしくて、誤魔化すようにレナはカラメルの層をスプーンで掬って口へと運ぶ。
「美味しい？」
「ん……甘い」
舌に広がるのはカスタードの濃厚な食感と、バニラの風味。
9割5分デートと化した間食を満喫するレナの気分と同じく、蕩けるような甘さだった。
何を隠そう、レナは少年と時間を共有するのが好きなのだ。
少年と2人で向き合っている時だけは無理に自分をねじ曲げる必要も他人を模倣する必要もない、ありのままの自分でいられる。
レナは正しく自由だった。

「好き。アン――いや、プリン」
「なら良かった」
「アンタとなら何でも楽しめるわ」と暴発しそうになった言葉をレナは無理矢理引っ込める。
そして少年も追及したりはしない。
話したい事を、話したい時に話したいだけ。
無言の間すら楽しめる、熟年夫婦が如き以心伝心が2人の間に存在しているのだ。
「ねえ」
「ん？」
「レナはどうするべきだと思う？」
――が、レナはその穏やかな時間を自らの手で打ち壊さねばならない。
自分が自分を止めない為に、少年に問わねばならないのだ。
「昼の話？」
「うん。正直言ってアンタとももこの回答は百点満点よ。レナは何にも思い付かなかった」
「別に、やりたい事を言っただけだから、満点も何も無いと思うけど」
「取り敢えず行動を起こすってのが百点満点なのよ」

少年は取り敢えずキュゥべえを殴ると決意していた。
十咎ももこは取り敢えずキュゥべえを探し出すと結論を出した。
例えその場で思い付いた適当極まりない物だとしても、レナにとっては最適解に感じられるのだ。
だって「何かをする」と決断出来ているのだから。
「レナの本質は何も変わってないって事。もっと強くなりたい、もっと素直になりたいって思ってるだけの水波レナから何1つ変われちゃいないのよ」
いや、本当は心の隙間で燻り続ける不安を打ち明けてしまいたいのかもね、とレナは心の中で呟いた。
趣味が合う、一途な想いで繋がっている、他人には話し辛い本音を語る事が出来る。
間違いなく、少年と付き合い始めてからレナは幸せだった。
「キュゥべえがいなくなったって聞いた時も、何も出てこなかった。『探すべき』って言うのが正しいのに、自分の意見なんて持っちゃいなかったのよ」
強くなるべきな筈だ。
自分の殻を破るべきな筈だ。
それなのに好意と依存を履き違えて、停滞しているのではないか。
寧ろ逆行しているのではないか。

こうした疑念がキュゥべえの一件で、遂に形を持って表れた。
「だから教えて。レナはあの時どうすべきだったのか。レナはどう思うべきだったのか」
知らなければダメだ。
理解しなければ自分でいられない。
でも答えが分からない。
だから少年に問うのだ。
それもまた依存の形だとしても、兎に角答えが欲しい――――！

「レナって、頭良いバカだな」
「は？」
対する少年の答えは極めて簡潔だった。
毎秒３４０ｍの速度で射出された、称賛兼罵倒であった。
「いや、僕そんな深い事考えてないよ……？」
「……嘘。じゃあ何であんなにアッサリ自分の答えを出せるの」
「何でって、それがしたい事だからでしょ」

「したい、事……？」
　これもまた、簡潔極まりない回答であった。
　さも当然のように少年が言い放つのが、レナには到底信じられなかった。
「だって僕ら中学生だぜ？まだ大人の事なんてちんぷんかんぷんなんだから、思った通りにやるしか無いだろ」
「だって――」
「だってもへチマもあるか！中学生がやりたい事やって何が悪い！」
　此処が何処であるかも忘れたかのように、少年が叫ぶ。
　周りの事なんて考えもしない、愚直さだけが取り柄の少年が何かを心から伝えるには、これしか無いのだ。
「レナは真面目過ぎるんだよ！前にも言ったけどバカになれバカに！」
「バ――――!?」
「そうだよバカだよ！テストみたいに百点満点の答えだけ目指しやがってさぁ！そんなんじゃ息が詰まって苦しいだろうが！えぇ!?」
「それは、そうだけど――――」
「だったらもっと我が儘になれよ！自己中になれよ！それと――」
　悉くレナの言葉を粉砕した少年が、深く息を吸い込む。

そうだ。それを言い忘れてはならない。
悩むのは良い。足踏みするのも良い。
でも――――

「あ――」
「――自分を傷付けるのはもう止めてよ……！」
身を乗り出してレナを抱き締めた少年が、精一杯の言葉を絞り出す。
「理想の自分があるのは分かるけど、今の自分を否定するのは止めようよ。そんなの辛いだけだよ……」
自分を嫌いなレナが、少年は嫌いだ。
他人に向ける優しさはある癖に、自分には優しくなれないレナが嫌いだ。
でも、それで辛そうにしているレナが少年は1番嫌いだった。
「僕じゃ頼りないって言うならももこさんでも良いし、秋野さんだってきっと力になってくれる。だから、だからどうすべきかに拘って自分を傷付けるのはもう止めてよ……！」
別に魔法少女として戦うのが嫌なら止めてしまえば良い。
キュゥべえをどうでも良いと思ったのなら、放っておけば良い。

それで大変な事になるかもしれないけど、レナが自分を責めるよりはずっと良い。
少年の偽らざる本音が、レナの心に突き刺さる。
「大事なのはレナがどうすべきかじゃない。レナがどうしたいかなんだ」
「どう、したいか」
「レナは、何をしたい――？」
レナは。
水波レナはどうしたいのか。
強くなりたいのか、停滞したいのか。
「レナは――」
殻を破りたいのか、閉じこもりたいのか。
「レナは――――！」
それは――――少年の見舞いに行っていた頃から、決まっている事だった。
「アンタの隣で強くなりたい！」
言葉と同時に、夕陽に照らされたカフェが崩れた。
椅子が、机が、クリームブリュレが歯車の床に溶け落ち、太く編まれた毛髪の幕が切って落とされる。

そしてレナを抱き締める少年の背後、額縁に絵画を飾り付けた「ソレ」がいた。
「ボ、ボーン、ボーン、ボ、ボ――」
振り子の魔女（Teresa）
その性質は右往左往。
同じ場所で同じ時を過ごす事だけを望む停滞の象徴にして、「振子時計の魔女」である事すら捨てた堕落の最果てが鎮座していた。
「あれが――魔女」
「そ、怖い？」
「レナがいるなら怖くない」
「言うわね」
何の意味があってカフェに乗り込んできたのかは分からないが、結界に取り込まれてしまったのなら抱き合ってもいられない。
トトン、とステップを踏んで少年と位置を入れ換えたレナの瞳が無粋な闖入者を睨み付ける。
「アンタは危ないから下がってて」
「了解。それなら今日は僕がキュゥべえ代理だ」
「ふん――ったく、折角良い所だったのに水を差すなんて魔女の癖して中々度胸ある

じゃない」

離れていく少年の体温に名残惜しさを感じつつ仁王立ちするレナの左手で、宝石（ソウルジェム）が青く光った。

それは少女の意志の煌めき。

それは少女の戦う決意。

故にそれが少年の視界を焼く程強く輝けば――

「さっさと片付けてＣＤ買いに行くわよ！」

――青と白のストライプ柄ワンピースを身に纏い、今にときめく魔法少女がステージ（結界）に降り立った。

炎の料理少女、リブート

少年はプリンが好きだ。
カスタードと聞けば木漏れ日の小屋へ、ヨークシャーと聞けばこれまた木漏れ日の小屋へと駆け込む位にはプリンにのめり込んでいる。
精々ご飯を炊いて味噌汁を作る程度の腕前しかない癖に自宅でプリン製作に勤しむ辺り、既に色々と「手遅れ」な感じがあるが当人は一向に気にしていない。
1にレナ。
2にプリン。
3、4にレナで5もプリン。
少年は脳の40%をプリンによって占拠されたプリン人間なのだ。
別に人類の自由と平和を守ったりはしない。
ではプリンの何が好きなのか、と聞かれれば少年は首を傾げるだろう。
味は好きだ。少年は甘い物を得意としていなかったが、プリンだけは例外だ。
口触りも好きだ。まろやかでとろけるような食感は、少年にとって至福の瞬間である。

だがそれが1番ではない。プリンに拘る理由が、何処かにある。
少年は考えた。
己のアイデンティティに関わる問題であるが故に、足りない頭を使って必死になって考えた。
そして退院から2ヶ月と14日経った今日この日、少年は遂に答えを得た。
そう、つまりは――――――

「多分卵使った料理が好きなだけだわコレ」
「久し振りに顔を出したと思ったらあなたは何言っているんですか」
「や、自己分析の結論が出ただけ」
突如訳の分からない事を言い出した少年に、少女が冷ややかな目線を送る。
それは時計が午後8時を回り、客も疎らになってきた頃の事であった。
神浜市は北養区、創立100年越えの地域に根差した老舗洋食屋「ウォールナッツ」で少年と栗毛の少女――胡桃まなかは駄弁っていた。
「ん……相変わらずまなかの作るオムライスは美味いね」
「そりゃあもう、私は未来のオーナーシェフたる胡桃まなかですから。オムライスなら誰にも負けませんよ?」

「自信満々なのも相変わらずだ」

そのコックコートと緑の四角巾が示す通り、胡桃まなかはウォールナッツの厨房で働くシェフである。

少年はまなかの作った芸術作品であるオムライスを心行くまで堪能する者、即ち客だ。

と言ってもただの客ではない。

「ひぃ、ふぅ、みぃ……大体4時ヶ月振りですか。まなかはいまかいまかと首を長ーくして、お待ちしておりましたよ？」

「常連だったもんね」

「何を言うんですか。あなたは今もウォールナッツの大切な常連客様です」

「……何か、照れるなぁ」

指を折って数えるまなかの言葉が示す通り、少年はウォールナッツの常連客でもある。

事故に遭う前は最低でも週に2回訪れまなかが作ったオムライスを食べる、言ってしまえば重度のウォールナッツフリークだったのだ。

「てか僕と喋ってて大丈夫なの？」

「今日はもうピークも過ぎましたし、少し位ゆっくりしても問題はないと思います」

「そっか……」
ゆったりとした会話を楽しみつつも、皿に盛り付けられた黄金色が少年の腹へと消えて行く。
少年は食べるし、まなかは喋る。
そう、あくまでこの場における本質は食事だ。
しかし、「世界一」を自称し実際相応の実力を持つまなかが己の戦場を一時放置して少年と言葉を交わしているのにはそれなりの理由があった。
「いやぁ、あなたが車に轢かれたと聞いた時は私も心臓が止まるかと思いましたよ」
「そんなに？」
「はい、そんなにです！私は常連さんの顔と名前は１人残らずぜーんぶ憶えてますからね！その大切なお客様が減ってしまったら悲しいです！」
「はは……そう言って貰えると光栄だよ」
胡桃まなかは料理人だ。
料理の研究に日々取り組み、最善の食を提供する事に腐心するある種の芸術家である。
だが、それら全てはウォールナッツを愛する「お客様」あっての話なのだ。
故にまなかが少年の事を気にかけるのは当然であり、久方ぶりの来店に歓喜するのも

また当然の話だった。
「で、退院から今までは何してたんです？」
「え、どしたの急に」
「いや別に、何でも無いですけど？」
「え、その、いや……怒ってる？」
「やだなぁ、お客様に怒る訳ないじゃないですか。ただの世間話ですよ」
純然たる事実として、まなかは別に怒ってなどいない。
少年が後遺症もなく退院した事、そして再びウォールナッツでオムライスを食している事をまなかは心の底から喜んでいる。
だが、それはそれとして――「何でもっと早く来てくれなかったのか」と思わずにもいられないのだ。
年齢が近くて、それなりに会話が弾んで、作った料理を手放しで褒めてくれる、そんな少年に対してまなかは客とシェフ以上の関係を見出だしていた。
つまりはそう――友人だ。
料理一筋のまなかにしては純情で甘ったるい、そういう関係を築いたつもりだったのだ。
「薄情なんじゃないですか？」

「何がさ」
「その察しの悪さですよ。自覚無いんですか？」
ところがその友人はこの４ヶ月、自発的にメールの１つ電話の１本も寄越さなかったのである。
無論まなかが連絡を取れば返事は返ってくるものの、内容は男子らしくシンプルな――見方によってはそっけないとすら感じられる代物だったのだ。
少年はまなかが料理だけで生きているとでも思っているのだろうか。
まなかにとって料理は人生を捧げるべき対象だが、決してそれだけで生きているのではない。
「え、いや……怒ってるでしょ」
「怒ってないです」
「怒ってるよね？」
「怒ってないですっ」
そうだ、胡桃まなかは怒ってなどいない。
だがまぁそう、強いて言うなら――拗ねている。
全くもって乙女心も分からない少年に対して複雑な思いを抱いているのだ。
（まったく、分からない人です……）

或いはもう少し気安い関係であったなら遠慮無く口に出せただろうが、少年がまなかをどう思っているかなど直接聞ける筈もない。
もし「ただの客」なんて言われてしまったら、まなかは相当に落ち込む自信があった。
故にどこぞの金髪モデル（阿見莉愛）にするような刺々しい言葉遣いになるのもまた仕方ない事なのだ。
「で、何してたんですか？」
「言わなきゃダメ？」
「ダメです」
「ダメか……」
「それとも、人に言えないような事してたんですか？」
こんな事を聞いて何になる。
まなかの心は何処にある。
本当はもっと穏やかに話したいのに。
下らない事で笑い合いたいのに。
それなのに心の片隅に巣食う「何か」がまなかの口を乗っ取り、心にも無い言葉を吐き出し続けている。
「分かった、分かったから。言うよ」

「ようやくその気になりましたか。キリキリ吐いて下さ――――!?」
――だが、この時になって胡桃まなかはようやく己の失敗を悟った。
猛烈に嫌な予感がする。
客の様子を窺い、不満を感じさせない為の観察眼が最悪のタイミングで発動してしまったのだ。
（そんな、そんなまさか――）
当然の事ながら、少年はまなかの心など知りはしない。
知る訳が無い。
人は自分の事しか知らないのだから、誰かに知って欲しいなら言葉にするべきなのだ。
だがそれをまなかが怠った以上、少年が察する事に期待した以上２人の関係は良くて友人、悪くて知り合い程度に過ぎない。
だから――――
「彼女、できたんだ」
「は――――」
この結末もまた、胡桃まなかにとって当然の事と言える。

そして凍り付いたまなかの心中を、少年が察せる筈も無い。
２人の距離は、飽くまで「友人」止まりだから。
「普段は夕飯作ってたり教えたりしてくれるんだけど最近魔女た――いや、用事で忙しくてさ」
「は、は――――」
気付けばまなかはコックコートの裾を固く握り締めていた。
少年は嬉しそうに――本当に嬉しそうに語るのだ。
好きなのだろう、愛しているのだろう。
分かる、まなかにはよく分かる。
だってまなかもそれを向けて欲しかったから。
少年からの好意を独占する彼女とやらが心底羨ましい。
「でもカップ麺はダメだって言うから、久し振りにウォールナッツで食べようかなって……まなか？」
「は、はは――――」
――なんですか、それは。
まなかは暗雲が立ち込める心の中で呟いた。
代わりか。ウォールナッツ（胡桃）は彼女の代わり扱いか。

怒りと、後悔と、嫉妬が心という鍋の中でぐつぐつと煮え立つ。
だが、本来はそれが自然なのだ。
レストランは食卓の代理であり、少年とまなかの関係が友人でしかない以上、ウォールナッツは「彼女がいない時に夕飯を食べる場所」以外の何物でもない。
（でも、でも――仕方ないですよね）
可能性はいくらでもあったのだ。
もっと早くに自分の気持ちに気付けていたら。
或いは1度でも直接見舞いに行っていれば。
「友情」という種をそのまま腐らせずに「恋慕」へと発展させられたら、まだ何かあったかもしれないのに。
つまりは、完全無欠に自業自得だった。
「ははは、あはははは！」
「な、何だよ、笑う事無いだろ」
だからこそ、まなかは笑う。
湿った心を、惨めな自分を、やりきれない未練を纏めて笑い飛ばすのだ。
「なぁんだ、それならもっと早く言ってくれれば良かったんですよ！今度赤飯でも炊きましょうか？」

「それは、まだ早いだろ」
「あはは、それもそうですね。いや失敬、他人の色恋なんて初めてですから私も舞い上がっちゃって」
まなかは苦しかった。
必死になって堪えるが、それでも涙が溢れそうだった。
だが――笑う。
精一杯、無理矢理にでも作り出した笑顔を少年に向ける。
どうせ長くは保たないだろうが、まなかに残された料理人のプライドがそうさせているのだ。
そして幸いにも、少年がバイブ音を鳴らすスマホを取り出した事でまなかの努力は実を結んだ。
「――ん、レナが近くまで来てるのか」
「彼女さんですか？」
「うん、もう其処まで来てるみたいだし今日は帰るよ。ご馳走さま」
「お見送りしますよー！」
彼女――少年の彼女。
これ程迄に心を掻き乱したその存在がウォールナッツの近辺に来ていると聞いて、ま

なかは黙っていられなかった。
（……どんな人、なんですかね）
見送りでも何でも、ソイツを一目見なければ諦められない。
この自覚したばかりの恋心を捨てられない。
まなかはぐらぐらと揺れる視界の中で何とか少年に荷物を持たせ、レジを叩き、そして扉を開く。
「涼しい、ですかね？」
「うーん、もう少し気温が下がると良いんだけどな」
ウォールナッツから1歩踏み出せば、そこはやや温い風が吹く夏夜の北養区であった。
何もかもが中途半端で、今のまなか自身と同じように煮え切らない。
そして――
「あ、レナ。終わったんだ」
「うん、今日のは中々手こずったわ。まさかももことかえでの力まで借りる事になるなんて……」
「無事なら良いんだ」
「そう？」

「そうだよ」
赤いセーラー、即ち神浜市立大附属学校の制服を纏った水色少女がムスっとした表情で看板の横に立っていた。
そして少年を見るや顔を輝かせ――隣に佇むまなかをジロリと見やる。
「――ふん」
「――――」
青い瞳がまなかのそれとかち合うも、興味無さげに少年へと移った。
正に鎧袖一触。
恋する少女は強いが、愛を手にした少女はもっと強い。
故に一目でまなかが相手にならない事を見抜かれるのも必然なのだ。
「ほら、行くわよ」
「あぁちょっと引っ張らないでよ、服が伸びる」
「うっさい。新西区にだってレストランの1つや2つあるでしょうに、何だってこんな所まで来てんのよ」
「や、美味いんだよここのオムライス――――」
「本当にめんどくさいわね――――」
2人がまなかから離れていく。

仲睦まじそうに、誰が見てもお似合いな2人が光る街並みに消えていく。

「――――あぁ」

その姿が棒になり、点になり、完全に消え失せるのを見送ったまなかは堪らず扉に背を預けて、ずるずると崩れ落ちた。

「――っく、ふぅ、うぅ……」

泣いていた。

胡桃まなかは実る事はおろか成長すらせず腐り落ちた恋に泣いていた。

コックコートが汚れる事も、店の中にいる客の事も考えずに膝を抱えて嗚咽していたのだ。

「うぅあ、あぁぁぁぁぁ……！」

料理に対しては誠実でありたい。

こんな所で泣いている場合でもない。

だけど、今は。

今だけは、この悲しみに浸って――――

■■■

時刻は、午後８時を回りました。

あぁ、神様――――

「――――で」

「何よ」

「なんで来てるんですか」

どうして私、胡桃まなかはげんなりと――いや、どんよりとした気分で水波レナさんに問いかけなければいけないのでしょう。

何が悲しくて負けを悟った相手と顔を合わせなければならないんですか。

しかし相手が客である以上、無視する訳にもいかないのが料理人のプライドであり世知辛さ。

せめて――いえ、普通に八つ当たりとして尖った言葉が出るのは仕方ない事なのです。

「アイツが入院中からずっとここのオムライスは美味いって言うし、魔女た――ううん、用事が近くであったから来てみたのよ、悪い？」

「へぇ……いや、悪くはないですが」

悪くない。

全くもって悪くないです。

寧ろウォールナッツの売り上げに貢献してくれるなら諸手を上げて歓迎すべき、なのでしょうが。

昨日の1件が何より辛い。

せめてもう少し、1週間でも空けてくれれば気持ちに整理も付けられたのにと思わずにはいられません。

恋敵――にすらなれなかった相手と会話を楽しめ、なんて酷な話でしょう。

「……で、聞きたい事があるんだけど」

「はい？」

「昨日はアイツと何話してたのよ」

「き、昨日ですかぁ？」

「声落として」

「あ、はい」

ボソボソと蚊の鳴くような声でいやーな事を聞いてくるんじゃありません！

……とも言っていられないですね。

昨日は昨日、今日は今日。

今はスッキリ割り切れずとも、いずれ――――

「大切な常連客が1人戻ってきた事を喜――――」

「大切う!?」
……はぇ？
今の言葉の何処かに、叫ぶ要素ありました？
て言うか他のお客様ビックリしてますし。
営業妨害なら叩き出――――んん？
「た、たたた大切って何!? 許嫁とか!?」
「いや時代遅れも甚だしいと思いますけど」
「じゃあ大切って何よ！愛人とか!?」
「違いますけど。て言うかそうだとしたらどうするんです？」
「そうなの!?」
「だから違いますって。例え話ですよ」
これは。
これは、これは。
顔を赤くしたり青くしたり、ひょっとしたら水波さんは相当面白い人なのかもしれないです。
からかい甲斐があると言うか、私より身長が低いのもあるので何だか年上の気がしませんよ。

「ふーん、ひょっとして水波さんは私とあの人が付き合ってたら困るんですか？」
「困っ……!?い、いや困らないわよ！」
嘘ですね。
水波さんは知らないでしょうが、私は昨日あの人から直接聞いているんです。
あの人と水波さんは付き合ってるんでしょう。
毎日仲睦まじくイチャイチャしてるんでしょう。
でもそれを他人にひけらかすのは恥ずかしいんでしょう。
昨日までの私と同じように。私には分かりますよ。
「困らないんですか」
「こ、困らないわね。うん、あんなヤツと付き合うワケない……」
「へえ……」
私の観察眼が、ピピッと反応します。
恐らく水波さんがあの人と交際関係にあるのを知っている人は、そう多くないはず。
水波さんの性格からして、いても2人か、3人。
他の人は知らない、閉じた関係。
つまり――――
「へぇぇ……」

「な、何よ……」
水波さんは私に奪われる事を恐れてるって、そう言う解釈で良いんですね？
それでもし、もし公になっていないのであれば私の恋はまだ終わらないって事で、良いんですかね？
そう気付いた途端、私の心が燃え上がります。
所謂バーニング・ラヴってヤツです。
「告白したらどうします？」
「どっ、どどどどどうも？しないけど……」
「ホントですかぁ？」
オムライスに突っ込んだスプーンが水波さんの震える手に合わせてカチャカチャ鳴ってます。
行儀が悪い事この上ないですが、今この場だけは見逃してあげますよ。
そう、これは略奪愛の宣戦布告ですからインパクトが重要なのです。
さぁ恋のライバルさん。
心して受け取って下さい――――！
「――――それじゃあ、あの人はまなかが奪っちゃいますね！」

「――!?待っ、待ちなさい！アンタまさか気付いて――――」
「おっと調理が忙しくなるので失礼します！」
「ちょっと――――！」
くるくるくるりと身を翻して、胡桃まなかは華麗に去ります！
ちょっと本気を出した私に掛かれば恋愛なんてお茶の子さいさい！
オムライスより味わい深く、プリンよりも甘く調理してあげます！

文学少女恋烈戦

「……？」

視線を下ろせば、純白の円形テーブルと湯気を立てる熱々の紅茶が1杯。

正面を見れば重厚な革張りの椅子が２つ、無機質に鎮座している。

「な、何これ……」

ふと気が付くと、少年は簡素な作りをした椅子に座って――否、拘束されていた。

ファンシーな装飾の付いた、ヒモのような何かが僕の四肢を椅子に縛り付けているのだ。

右手――ダメ。

左手――もダメ。

両足など以ての外だ。指先くらいしか動かせる部分がない。

抜け出す隙など一分もなく、少年は完全無欠に着席を強要されていた。

「ひと、じち……？」

少年の脳裏に浮かんだのは、ドラマだとか漫画だとかでよく見る人質の姿だ。

しかし現実として、ズタ袋でも被せられれば拷問なり処刑なりが始まりそうな雰囲気

に晒されている。
身代金がどうだとか、復讐がどうだとか、そう言ったテレビの中での出来事だからこそ笑えるシチュエーションが少年の身に降りかかっているのだ。
「ど、どうなってんだよ……」
――だが、少年には拐われた記憶が無い。
こうなる前の少年にとって最後の記憶は普段通りの、しかし魔女退治が忙しいのでレナはいない、そんなちょっぴり寂しい下校中であった。
ももこに聞く所によれば最近は神浜の此処彼処で魔女が蔓延っている上にやたらと強く、魔法少女は皆チームを組んで戦うのが基本となっているらしい。
それもこれも例のキュゥべえとやらが行方不明になった事が原因だと推測されるが、だとすれば迷惑な事この上ない。
レナとの時間が少なくなった責任はどう取ってくれるのだろうか。
「――じゃなくて！此処何処だよ!?」
そう、キュゥべえの糾弾などしている場合ではない。
今自分が何処にいて、何をされているのか。
非常事態なのだから、先ずはそちらを優先するべきだろう。
少年は逸れた思考を戻しつつ取り敢えず左右を見渡して――

「ええ……」
何これきっも。
そんな在り来たりかつレビューサイトの星1つとかにありそうな言葉しか少年は思い浮かばなかった。
見た感じ此処は――図書館だと推測される。
如何にもそれらしく本が詰め込まれた棚がもう滅茶苦茶沢山、それこそ地平線の果てまであるんじゃないかと思う位に並んでいるのだから間違いない。
「でか……」
が、しかしそれが馬鹿みたいにデカい。
人の2、3倍とかそう言う次元ではなく5階建てのビルに匹敵する位高いし、その癖梯子とかの類は一切見当たらないのだ。
この縮尺から何から全部滅茶苦茶にしたような図書館が神浜市にあるなんて、少年は聞いた事も無かった。
そしてそんな棚と棚の隙間にある通路のド真ん中で、取って付けたような茶会の席に無理矢理着席させられているのが少年という訳だ。
「いや、訳分からんなこれ」
自分を拐った理由はなんだ。

自分を拘束する意味はなんだ。
この空間は何なんだ。
ひょっとして、この風景から得られる情報が何も無い場所で椅子にくくりつけられたまま何時までも放置されるのだろうか。
状況がもたらす不安感に無駄だとしりつつもがいていると、羽音のような、何かが擦れる不快な音が耳を衝く。
「――？」
誰かが、近くにいる。
右へ左へ、前へ後ろへ。
言葉では形容し難い耳障りな音を立てて何者かが徘徊している。
1人なのか複数人なのか、音が書架で反響するのでそれすら把握出来ないが、確かにいるのだ。
「だ、誰かいるんですか……？」
故に、少年は一縷の希望を込めて助けを求めた。
ひょっとしたら自分と同じような事態に陥った人が一足先に抜け出しているのかもしれないと、そう思ってしまったのだ。
――それが己にとって、最大の失敗だと知らずに。

「一ギ「「ギゴギ」ギゲ一」

「なんっ……魔女!?」

少年の呼び掛けに応じて本棚の陰から現れたソレは、青いキースイッチだった。

ただし鉄の足と翼、そして先端に唇を貼り付け無理矢理鳥の形に整形したような、とびきり奇怪なキースイッチだ。

それも1匹、2匹処ではない――今まで何処に隠れていたのかと思うほど大量のソレが、少年の周りをギィギィと不快な音をがなりたてて飛び回る。

(ヤバい――ヤバいヤバいヤバい!)

逃げ出さなければならない。

是が非でもこの場を離れなければ少年は死ぬ。

孤立無援のこの状況で相手が魔女とくれば確実に死ぬ。

或いは優しく。

或いは惨たらしく殺されてしまうと少年の本能が絶叫している。

「このっ……! 解けろよ!」

拘束から抜け出そうと必死になってもがくが、ヒモのような何かはビクともしない。

ファンシーな花柄が、キースイッチの唇が、無様に足掻く少年を嘲笑っている。

そして、そんな少年の後ろに絶望がもう1つ。

「―ギ┌ゴグ┐ゴグガ」グ―ギギギ┐―」

「は、あ――――？」

自力で動く為の足を持たないソイツはずっと其処にいた。

しかし人は小さすぎるモノを咄嗟に識別出来ないのと同時に、大きすぎるモノもまた識別出来ないのだ。

故にただ鎮座しているだけだが、あまりにも大きいソイツを少年は今の今まで認識していなかった。

「印刷、機――？」

首を捻ったその先で少年を見下ろすソイツは、巨大な印刷機だった。

傘のような構造物を備え、毒々しいまでの極彩色塗装を施された印刷機が少年の背後で不気味な駆動音を立て始めているのだ。

（――これ、死んだわ）

もうどうにもならないと少年は己の運命を悟った。

諦めたくない。こんな所で死にたくない。

だが精々指先しか動かせないこの状況で少年が生き残れる確率など、１％だってありはしない。

一体何処の誰が何の為にこんな事をしたのか、何一つとして分からないが自分が死ぬ

事だけはハッキリしていた。
だけど、だけどせめて――――

「レナの声を聞いてから死にたかったなぁ……！」
棚の列に空しく消えた少年の願いすら嘲笑うかのように、極彩色の印刷機が光を放つ。
そして恐怖で震える己の声と冷めたティーカップが、少年にとって最期の記憶となった。

アラもう聞いた？誰から聞いた？
記憶キュレーターのそのウワサ

■■■

「本当に殺さなくて良かったのかにゃー？」
「良いんだ。僕達にとってはその方が正しい選択さ」
意識を失い項垂れる少年の対面で、薄桃色と飴色の２人の魔法少女が紅茶を啜る。

いつの間にかキースイッチの魔女達は消え失せ、茶会の空席は埋まっていた。
「……て言うか、生きてる？」
「間違いはないと思うけどね」
拘束が解ければ床までずり落ちそうな程ぐったりと弛緩した少年の足を傘でつつきながら、飴色の少女――里見灯花が問い掛ける。
灯花としては別に少年の命などどうでも良かったのだ。
確かに少年は退屈で緩やかに死んでいくだけの入院生活中における、数少ない起伏だった。
だがそれだけだ。
少年は灯花から見れば秀でた部分など何一つ無い有象無象そのものであり、魔法少女となった今の2人にとっては少々都合が悪い人間でしかないのだ。
だから入院生活へ逆戻りしてもらうつもりだったのだが――――
「それにしてもねむが反対するなんてねー。一体どういう風の吹き回しかな？」
「どうもこうもない。僕達は彼に返すべき恩があるだろう」
灯花の軽薄な質問に、ムッとした表情で薄桃色の少女――柊ねむが言葉を返した。
ティーカップを持つ手に力が籠り、紅茶の水面がねむの不快感を示すように波打っている。

普段であれば感情的な灯花をねむが諌める関係なのだが、今日この日に限ってはそれが逆転していた。
「恩?そんなものこの頭カチカチ山から受けた覚えは無いけど……」
「閉塞した病院に押し込められた僕達にとって、彼はとても有意義だった。違うかい?」
「それは――」
「灯花の『叔父さん』と一緒だよ。彼自身に見るべき所が無かったとしても、彼の話す日常は僕達にとって何より得難いモノだった。これも違うかい?」
的確に選び抜かれた言葉の槍が灯花の反論を先回りして貫いていくが、そのあまりにもらしからぬ強引さにねむ本人も苛立ちを隠せずにいた。
「灯花、僕達は如何なる犠牲を払ってでもイヴを孵化させなければならない」
「だったら邪魔になるコイツは昏睡状態にでもしておくしか――――」
「でも、人として最低限の良心は残しておくべきなんじゃないかな」
「へ――?」
そもそもからして、ねむは少年に危害を加えるつもりなど毛頭ないのだ。
少年を植物人間まで追いやる理由は存在しないし、邪魔だと言うならそんな事をしなくとも遠ざけてしまえば良いと言うのがねむの結論である。
「丁度お誂え向きのウワサもいるし、雀の涙程度でもエネルギーの回収にはなる筈だ」

そう、そしてその為に用いたのが少年の背後でガタゴトと音を立てて稼働する「記憶キュレーターのウワサ」だ。

記憶キュレーターのウワサは人に望んだ記憶を見せると同時に、その者の記憶を奪い取る性質を持つ。

これによって少年からねむと灯花に関する一切の記憶を消去し、２人に繋がりうる要素を全て絶つのだ。

万事滞りなく事は進んでいたが、

ねむにとって惜しむらくは――――

「まぁ、彼が魔法少女（水波レナ）と交際しなければこんな事をする必要も無かったのだけれど」

「へぇ……」

ねむの言葉が僅かに嫉妬を帯びたのを、灯花は聞き逃さなかった。

入院中から度々ねむはそういう声音を発する時があるのだ。

だが誰よりも感情的な癖に他人の機敏には疎い灯花が、ねむの心中を理解出来る筈も無い。

故に灯花の中では「ねむは人間観察のサンプルに余計な手が加わった事に苛立っている」モノとして処理されていた。

「なぁに？新しい小説のネタにでもするの？」

「違うよ。そんなんじゃ、ない」

だが、ねむの表情は行き場の無い焦燥と憂いで心なしか悲壮感を漂わせている。

ねむとって少年はそんなに軽いモノではないのだ。

（彼だけは殺せない。殺せる訳が無いんだ）

灯花の語る通りどこまで行っても少年は凡人でしかなく、無力感に苛まれる一般的な中学生でしかない。

だがそれが何だと言うのだ。

あの日、病院内で迷った少年が偶々道を尋ねに入った病室が、柊ねむの全てを変えた。

それは即ち物語の始まり、ボーイミーツガールだった。

メディカルセンターの中にいては絶対に得る事の出来ない、瑞々しい日常を少年は語るのだ。

それが少年と灯花にとってどれ程陳腐でも、他の誰でも出来る行為でもねむにとっては何より新鮮だった。

（彼がずっと僕だけを見ていてくれれば良いのに。そうすれば記憶を消す必要も無くなるんだ）

つまり柊ねむにとって少年は――運命の相手だ。

少年にあってねむには無い「普通」が、彼女を惹き付けていた。

だと言うのに、どうして少年は魔法少女（水波レナ）なんかと付き合ってしまったのか。
運命はあまりにも残酷だ。
「せめて水波レナがいなければ、僕にだって可能性はあっただろうに」
何しろ初恋なのだ。
少女にとって唯一無二の、７７億分の１なのだ。
それに手が届かないとなれば、未練がましい言葉が漏れるのも致し方無い事と言えるだろう。
そして挙げ句の果てに出会いの記憶まで消さねばならないと来れば、流石のねむとて悲劇のヒロインを気取りたくもなる。
どうにもやりきれない思いを抱えたまま深く溜め息を吐いて――

「ねむ、これ弄るね？」
「――――んん？」
いつの間にか席を離れ、絶賛稼働中の記憶キュレーターのウワサをペチペチと叩く灯花の姿に首を捻った。
弄る。
弄ると言ったのかこの天災は。

大方機械として非効率的な所を見付けてしまったので、「変換」の固有魔法で最適化しようと言う心積りなのだろうが今、ウワサが何をやっているのか灯花は忘れてしまったのだろうか。

「いや、ちょっと待っ――――」

「えっ」

慌てて立ち上がるも時既に遅し。

印刷機の足に触れた灯花の手のひらが淡い光を放ち――

「ぎゃあ」

あまりにも短く、それ故に深刻さを感じさせる悲鳴と共に椅子に拘束された少年が激しく痙攣する。

さしもの灯花も慌てて手を離したが、これもまた遅きに失していた。

「灯花ぁ！」

「あっ――――」

灯花の視線が激情を露にしたねむと打ち上げられた魚のように跳ね回る少年とを行き来し、そこでようやく己のしでかした事を悟った。

――――ひょっとして、これは死ぬのでは？

「――――！」

効率化を中断、変換しつつあるウワサの構成を再変換してあるべき形へと戻す。
しかし全身から白煙を立ち上らせ、白目を剥いて弛緩する様を見て「無事」などとはとても言えまい。
５秒も掛からずに記憶キュレーターのウワサはかつての機能を取り戻したが、少年へのダメージは既に甚大であった。
「灯花、君は自分が何をしたのか理解しているのかい？」
「それは――」
「理解しているのかと聞いているんだ。君の軽率な行為で彼が死ぬ所だったんだぞ」
灯花は恩人を殺すつもりなのか、とねむは煮えくり返った腹の中で叫ぶ。
そう、彼女は見誤っていたのだ。
この場に呼ばなかった３人目程ではないが、灯花も十分に何をしでかすか分からない人間である事をすっかり失念していた。
幼馴染みだとか灯花に悪意は無かっただとか、そんなモノ言い訳すらなりやしない。
「よいしょ…っと」
己の失策に気付いたねむの行動は素早かった。
灯花が何かするより、何か言うより早く少年に駆け寄りぐったりとした肢体に手を回す。

もう色々と手遅れだが、兎に角今すべきは少年を安全な場所――即ち自宅へと戻す事だ。

「……どこ、行くの？」

「こうなってしまえば僕達の悪巧みも失敗だし、せめて形だけでも取り繕う事にするよ――っとと」

今更萎らしくなった灯花に棘の籠った言葉で返しつつ、ねむは少年を背負う。

思った以上の質量が背中にのし掛かるが、寧ろそれが健康さを感じさせて心地好い。

そう、態々そんな事しなくてもウワサか何かに運ばせれば良いのだが、今のねむは「そう言う事」をしなければやっていられなかった。

（そうさ、どうせ届かないんだから――今くらい）

やはり自分は悲劇のヒロインなのだろう、とねむは深い溜め息を吐く。

恋愛にしても計画にしても、自分だけだけが貧乏くじを引かされるのだとセンチメンタルな感傷に浸っていなければ、やはり全部投げ出してしまいそうだった。

――本当に、生きる事は難しい。

■■■

「これで良し、と」

掛け布団を肩まで被り、穏やかな顔で眠っている少年を一瞥して柊ねむは満足気に笑みを浮かべた。

何やかんやあった――いや、ありすぎたが取り敢えず少年を五体満足で帰す事が出来たのだ。

これ以上に喜ばしい事は無い。

「折角なんだから僕の事も覚えてくれていたら嬉しいけど、どうなんだろうな」

――だが、どうか覚えていて欲しいと願う事は罪なのだろうか。

実際、ねむは記憶を消去するのにすら全力で反対したのだ。

「例え彼が僕達について喋っても脅威には成り得ない」とか「僕達は彼の友人だろう」とか、ねむにしてはあまりにも感情的で稚拙な表現だったが、出来るだけの反論はしたのである。

「或いは、ちゃんと忘れてくれたか」

しかしながら、いざ記憶を消去するとなったら一番積極的に動いたのもまたねむである。

灯花と3人目は不思議そうに首を傾げていたが、その実情は恐らく彼女達の想定と大きく異なるだろう。

「もしちゃんと忘れてくれたなら、僕は君に傷を残せた事になる。水波レナでは絶対に解決出来ない、深い傷をね」

そう、ねむは2人に黙って「それ」を奪うつもりだったのだ。

少年が生きていく上で大切な「それ」を記憶キュレーターに消去させ、癒える事の無い傷を刻み込むのだ。

そうすればきっと少年は考えるに違いない。

何時「それ」を失ったのか。

何故「それ」を失ったのか。

原因を――即ちねむを探して、しかしどうしても見付からない事に煩悶する。

「むふっ、むふふ……！」

ああ、想像するだけで堪らない。

ねむが少年を想って、少年が原因（ねむ）を想う。

物理的に逢う事が出来なくても、心は互いの事しか考えられなくなるのだ。

これ以上に素晴らしい事があるだろうか――いいや、ある筈が無い。

灯花が余計な事をしたせいでおじゃんになってしまったかもしれないが、逆に言えば

まだ可能性も残っている筈なのだ。
「平坦なだけの人生なんて詰まらない、だったかな。君は時々良い事を言うね、本当に」
ああ愉快愉快。
この際、吉と出るか凶と出るか賭けてみるのも面白い。
そんなやけくそ染みた事を考えるねむの瞳はどろりとした昏い光を湛えている。
たった1人の凡俗な少年が、あの柊ねむの才知を完全に曇らせていた。
たった1人への執着が、柊ねむを恋の魔物へと変貌させてしまった。

――――――故に
「こんにちは――！今日の夕御飯持ってき、ま――？え、どちら様ですか」
「――――うん？」
魔法を用いて不正に侵入したねむとは違い、鍵を開けて玄関から普通に入ってきた胡桃まなかに気付かなかったのもまた必然であった。

水より深くI

「――で、あなたは此処で何をしていたんです？」
「――」
なるほど、圧迫面接とはこう言うモノか、と柊ねむは納得した。
時刻はもう間もなく午後5時を回ろうとしており、初秋を感じさせる夕暮れの昏い陽光が部屋に射し込んでいた。
今、ねむとまなかは机を挟んで対面に着席して神妙な表情で舌戦を行おうとしている。
――お題は勿論、ねむと少年の関係性について。
「僕は以前――彼が入院していた頃に御世話になった者でして、何とか退院出来たので御礼に伺ったんですよ」
「入院中――ですか」
「そうです。彼は覚えていないかもしれませんが、僕は精神的に助けられましたから」
知識と感性による完璧な牽制がまなかに突き刺さる。
神浜市に於いて、口先八丁ならねむの右に出る者はいないだろう。

彼女が入院中に読んだ本の数は本棚の2つや3つで足りるモノではないし、だからこそ虚実入り交じった「どうとでもとれる」返答も朝飯前なのだ。
「それは――いや、でも鍵も無しにどうやって入って来たんです？まさか、ピッキングとかじゃないですよね」
「――――」
――しかし、まなかも「はいそうですか」と引き下がる訳にはいかないのだ。
だってどう見たって怪しい。
状況から何から、怪しくない所が無い。
故につい2ヶ月前の――少年を諦めそうになったあの日と同じ位、いや下手をすればそれ以上に嫌な予感がしてならないのだ。
その疑念を確かめる為に、つい先程使用したばかりの鍵を取り出してこれ見よがしにチラつかせてみる。
「レナさんやまなかと違って、あなたは鍵を持ってない筈ですが――どうなんです？」
「それは――」
二重リングに吊り下げられた銀色がチャリチャリと音を立て、それに釣られたねむの視線が物欲しそうに右往左往。
やはりと言うべきか、ねむは鍵を持っていないらしい。

ならばどう言い訳をするのか、或いは何を企んでいるのか。
根こそぎ吐いてもらうしかない、とまなかは判断したのだ。
だが――――
「開いて、ました」
「はい？」
「鍵が、開いていたんです」
ねむは重々しく断定した。
口答えも、二言も、何も許さないと言わんばかりの強い口調だった。
だがそれはこの場を勢いだけで乗り切ろうとする、あまりにもお粗末な戦術が表出しただけなのだ。
そもそもまなかに発見された時点でねむの思惑は完全に破綻しているし、深く問い詰められずとも直ぐにボロは出るだろう。
「いや、開いてたってそんな――」
「きっと閉め忘れてたんでしょうね。誰にでも『うっかり』はありますから、仕方ない事だと思います」
故にゴリ押す。
一切の反論を、疑問を整理する隙すら与えずに言葉の暴力で押し流し、まなかを丸め

込んだら全力で退散する。
最早口先八丁等と言っている場合ではないのだ。
下手に追及させたらねむ達まで芋づる式にバレかねない為、彼女に残された道はゴリ押し以外存在し得ない。
「いやでも――」
「ありますよね？」
「それは――――」
「ありますよね？」
「でも――――」
「あるよね？」

「あります……」
「分かって頂けたら良いんです」
まなかは屈した。
あまりにも横暴が過ぎると思いはしたが、人間誰しも「うっかり」は起こし得るのだ。
それを無いと断言する事は、まなかには出来ない。

「これで話は済みましたね。それではそろそろ日が暮れるので僕も帰ろうと思います」
「あ――――」
心の中で勝利の余韻に浸りながらねむは撤退を宣言する。
これでこの家から1歩でも踏み出せばパーフェクトゲームだ。
ゴリ押しでも何でも、目的を果たせればそれで勝ちなのだ、とほくそ笑んだねむは椅子から立ち上がり――
「そう言えば柊さんはあの人の何なんです？」
「何だって？」
聞き捨てならない発言に光の速さで着席した。
その一瞬で、ねむの頭脳は質問の裏の裏のそのまた裏まで読み取り――隠された意図を知る。
（これは――誘っている？）
まなかのそれは、挑発だ。
普段なら彼女なら一顧だにしないだろうが、恋を知ったねむにライバルを前にしてすごすご引き下がると言う選択肢は存在しない。
それを知ってか知らずか、この天真爛漫料理少女は所謂恋バナに話題を転換して柊ね

むを話のテーブルに引き摺りだそうとしているのだ。
（どうする――――？）
ねむ達として考えると、これ以上に無意味な事はない。
ねむ達の露見、計画の暴露、それら全てのリスクを跳ね上げるだけの危険な行為だ。
だが――ねむ個人としてはとことんまで付き合ってやりたい気分である。
寧ろまなかよりも4ヶ月早く恋心を抱いた者として、徹底的に上下関係を刻み付けてやりたいとすら考えていた。
「……友達、です。彼が覚えているかは分かりませんが」
「へぇ――」
だが、考えに考えた末ねむはねむ達を選んだ。
仕方無い、今は我慢の時なのだ。
ねむ達が計画を完遂しさえすれば、後は思う存分触れ合えるのだからどうにか堪えるしかない。
正に苦渋の決断――いいや、英断だった。
（仕方無い――仕方無いんだ）
そう、これは試練だ。
そう考えれば、どんな苦難も乗り越えられる。

ほんの４ヶ月前――不治の病に侵されていた時もそうだった。
柊ねむはそう遠くない日に尽きる命を試練と捉える事で、毎日を戦っていたのだ。
だから堪えられる筈だ。戦える筈だ。
それが、柊ねむの強さなのだか――――
「まぁまなかは毎日料理を作ってあげる仲なんですけどね！」
「は？」
それは、いけない。
ああそうだ、到底許されるべき行為ではない。
自分以外の人間が少年に料理を振る舞うなど、この世界で誰が許しても柊ねむは絶対に許さない。
だって、ねむは一生懸命料理を練習したのだ。
自分で米を炊いた事すらないド素人が、それでも退院してからの数ヶ月間家族を散々に振り回した事で何とか人並みにはなったのである。
――それを、努力の結晶を胡桃まなかは無価値にするのか。
「誰が、誰に、何を作っているって？」
「まなかが、あの人に、料理を作っているんです。未来の筆頭シェフが作る手料理を食べられるだなんてあの人も幸せ者ですよねー！」

「は――――」

何処と無く勝ち誇った様子で語るまなかに、ねむは愕然とした。

その語り草からするに、少年の胃袋がまなかに完全掌握されている事は間違いないだろう。

彼女は少年の食生活が御世辞にも「普通」とは言えない所につけこんで、瞬く間に食卓を制圧したのだ。

故にこその鍵――少年からの信頼の証が預けられている。

（完全に、出遅れている――！）

それは思わぬ伏兵、で済まされる話ではない。

その伏兵によって水波レナは台所を明け渡し、柊ねむは割って入る余地を潰されたのだ。

衣食住の内、比較的他者が関与しやすいであろう「食」を奪われたねむの脳裏には、早くも敗北の２文字がチラつき始めていた。

「あれぇ？どうしたんですか？」

「くっ……！」

そして、煽る。

ねむの心情を見抜いているのか、はたまた天然のモノなのか、胡桃まなかは兎に角煽

る。
小さな手の内で鍵束を弄び、充足感が滲んだ表情をこれ見よがしに見せ付けてくる。
恋敵が増える前に、その決定的な実力差で撃退しようとでも考えているのだろうか。
「貴女よりは、付き合いが長いつもりで――――」
「ずっと前から常連客だったんですよねー！」
「なぁっ!?」
でへでへとニヤケ面で語るまなかに、ねむは圧倒された。
これが恋愛強者と言うヤツなのか。
これが躊躇わない者のアドバンテージとやらなのか。
これでは、これでは――――
（勝ち目が、無い――――!?）
柊ねむは、己の周回遅れを悟った。
あまりの衝撃に、普段は理知的な光を灯しているアメジストの瞳は焦点を失い、両手も制御を離れてぶるぶると震えている。
よもや、よもや少し目を離しているだけでこんな事になっているとは思いもしなかったのだ。
（今だけは、灯花が羨ましい……！）

ここでねむが思い出したのは、灯花の滅茶苦茶腹立たしいドヤ顔だった。
自分にもあの奔放さがあれば、我の強さがあればこうはならなかったのか、とねむは後悔したのだ。
自分を「友達」に留めてしまった事も合わせて、理性を優先してしまったが故の敗北。
唇を噛み締めたとて1％も軽減されない嫉妬と羨望が身を焦がす。
「……」
「あれ、どうしたんです？」
故に、柊ねむは立ち上がる。
椅子を撥ね飛ばすような勢いで、決意に満ちて立ち上がる。
この悔しさと克己心を胸に、敢然と立ち上がるのだ。
「……！」
「え、な、何ですか……？」
まなかが不思議そうな顔をしているが、それが何だ。
もうちょっと何かしらあれば諸々の感情があれやこれやしてしまいそうですらあるが、それが何だ。
物語の主人公がそうするように、言わねばならない。
数多の政治家がそうするように、宣言しなければならない。
が顕現してし

さあ、心して聞くが良い――――

「これで勝ったと思うなよ――！」

「えっ」

完全無欠な捨て台詞と共に、唖然とするまなかを残してねむは少年の家を飛び出した。

そしてそのまま、文芸少女らしからぬ機敏さで夕陽に沈む新西区を疾走する。

「負けてない……！負けてなんて、いないんだ……！」

別に良いのだ。

今は誰かと心を繋いでいても最後はねむの所に来る運命で、その為の準備はもう終えたのだから。

ただちょっと出遅れただけで、結末は既に見えているから好きにやらせているだけなのだ。

そう己に言い聞かせながらねむは駆ける。

ただひたすらに、一心不乱に家路を駆ける。

「負けてなんて、いるもんか――！」

そうでもしないと、涙が溢れてしまいそうだった。

■■■

思えば、今日は色々と可笑しかった。
まず、僕は基本的に寝落ちはしない。
朝起きたら夜までギンギン――そう言うタイプなのだ。
小分けで寝るよりは纏めてぐっすり寝たい人間でもある。
――――ところが、なんだ。
今日、この日に限って僕は学校から帰宅するなり布団を被ってすやすやと、実に４時間も寝込んでいたらしい。
まぁ確かに体育があって、加えて不愉快極まりない数学まであったのだから疲れていたのかもしれない。
疲労が蓄積すれば誰だって寝落ち位するだろう。
――だが、それだけではない。
驚くべき事に、そもそも帰宅した記憶だけが無いのだ。
もうマジで全く、１ｍｍも無い。

教科書だとかノートだとか、そう言ったあれやこれやを通学鞄に詰め込んでいたと思ったら、いきなり布団の中にワープしていた――そんな感じなのだ。

ここまでなら、大分無理はあるがギリギリ「疲れていた」で済まされるだろう。

極度に疲労が溜まれば記憶がトぶ事だってある筈だ。

多分、きっと、ｍａｙｂｅ。

――しかし、それではどうしても説明がつかない事象に直面しているのだ。

誰がどう見ても不可解なそれは、今日の宿題を終わらせようと鞄からノートを引っ張り出した時に起こった。

「――あ？」

ノート、と言うのは基本的にパッと見では見分けのつかない物である。

色、サイズ、表紙、その他諸々で判別する事が出来ない訳ではないが、１度混ざってしまえば仕分けするのには相応の手間がかかる。

故にこそ、人はノートに名前を書く。

名前を書いて「これは私の所有物です」と明記する事で、他者から判別しやすくするのだ。

これはノートに限った話ではなく人は大切な物、所有権を明確にしたい物に様々な形で名前を書く。

それなのに――――

「何だ、これ。イタズラ……？」

ノートに記した筈の名前が、一冊残らず油性ペンで真っ黒に塗り潰されている。

教科書もだ。

割と物を忘れがちな事から教科書の裏側に書いておいたそれも、執拗なまでに塗り潰されているのだ。

――いや、それだけではない。

財布の中に挟んでいたスーパーのポイントカードから保険証に至るまで、名前が書いてある物なら何だって黒一色になってしまっている。

「いや、虐めってヤツか……？」

やりそうなヤツが何人か思い浮かぶ辺り、無くは無いと言い切れないのが悲しい所だ。

何しろ僕はレナの前でこそああだが、教室では何ら語るべき点を持たない所謂「陰キャ」そのものなのだ。

そして入院したせいで新学年の始めは登校出来なかったのも合わせて、中学は3年生だと言うのに居場所など何処にもない。

話す相手がいないし、いたとしても何を話せば良いのか分からないのだ。

いてもいなくても変わらない、空気みたいな人間が僕だった。

「あー、マジか……」

故にこそ、虐めの標的にされる事だってあるのかもしれない。

何も言わないという事は何をしても良い、と考える人間だっているにはいるのだ。

まぁそれを鑑みても今回の嫌がらせは偏執的で、悪意に満ちているが。

――正直、怒りだとかよりも先に困惑している。

こんな無駄に手間の掛かった嫌がらせをして、何が楽しいのだろうか。

修正テープを貼り付けてその上から名前を書けば大体片付く問題なのだから、態々こんな事をする意味が理解出来ないのだ。

「……顔洗おう」

それも、考え過ぎなのだろうか。

兎に角怒りにしろ悲しみにしろ、ネガティブな感情を抱えたままでは状況が好転させる事などありはしない。

この手の問題に直面した時、先ずは顔でも洗って気分をスッキリさせるのが肝心だと――そう思っていたのだ。

「は、ぁ――――――？」

だが。

しかし。
洗面所の鏡に己の姿が映った時、そこで漸く僕は事の深刻さに気付いた。
それはあまりに異常で、奇怪で、科学では説明不能な現象なのだ。
だって――――

僕の顔も真っ黒に塗り潰されていたから。
「何だよ……何なんだよこれ……！」
おかしい。
どう考えたって、こんな事有り得ない。
両手で自分の顔に触れて確かめれば、当然のことだがちゃんと目も鼻も口もそこに存在する。
なのに鏡に映った僕の顔はどこまでも平坦で、のっぺりしていて、挙げ句の果てに輪郭しか判別出来ない位黒く塗り潰されている。
僕は鏡を見ているのに、鏡の中の僕は何も見ていないのだ。
僕の理解を越えた事態に、呼吸がどんどん早くなる。
「な、ん――――」

落ち着け、しっかりしろ。
顔が映らなくなった位でなんだ。
目が見えなくなった訳でもないし、喋れなくなった訳でもない。
なら大丈夫だ。
僕は僕のままなんだ。
のままで――――

「――――あれ？」
って、誰だっけ。

水より深くⅡ

「はぁっ、はぁっ……！」

走る。

ただひたすらに、一心不乱に夜闇に沈んだ新西区を少女が走る。

とうの昔に陽は暮れ、警察官にでも見付かれば補導を受ける事は間違いなかったが、今の少女にそんな事を考えている余裕は無い。

尤も、およそ人間とは思えないスピードで住宅街を疾走する彼女に気付く人間等、ありもしないのだが。

「無事で、無事で……！」

息を切らして、スカートを翻して走る少女――水波レナにその電話が掛かってきたのはほんの１０分程前の事である。

ここ数ヶ月では殆ど毎日のルーチンと化したチームでの魔女退治を終え、ほっと一息吐こうとした時にそれは起こったのだ。

『助けて』

ただ一言、それだけ。

発信者は　　。
声は恐怖に震えていた。
しかしその一言だけで、レナがももことかえでに何も言わず走り出した動機としてはあまりにも充分だった。
確かに疲れている。
魔女退治はまかり間違っても楽ではないし、それ故体は疲労を訴えているのだ。
――――だが、それがどうした。
「ホントに、頼むから無事で待ってなさいよ……！」
彼が助けを呼んだのなら、レナは走る。
それが大東区の端っこだろうと神浜の外だろうと、水色少女は少年を救う為に走るのだ。
それがレナのやりたい事。
水波レナが自分で考えて、自分で見付けた、自分だけの使命。
だからどれだけ疲労が蓄積していようが、アスファルトを蹴る力強さに変化はない。
レナの意志は砕けない。
「……っく、見えた！」
そうして空気の読めない横断歩道と街頭の心許ない光に照らされた十字路を幾つか

飛び越したレナは、見慣れた少年の自宅を漸く視界に収めた。
明かりは――ある。
カーテンの隙間から生活の象徴である電気の光が漏れている事にホッとしつつ、少女は扉のシリンダーへと鍵を叩き込んだ。
解錠しようとして――――
「開いてる……!?」
本来あって然るべき手応えが無い事に、レナは青ざめた。
電気は付けっぱなし、鍵も開けっ放し、「助けて」の一言。
これらから導き出される答えはそう多くないのだ。
それ即ち、強盗である。
どれだけ少年が果敢であろうがナイフでも突き付けられれば沈黙するしかないし、あの怯え具合にも納得がいく。
普通の人生で凶器をチラつかされる機会なんて、早々ありはしないのだから。
「……よし」
そう、なまじ言葉が通じる分人を殺す魔女より、人を害する人の方が厄介なのだ。
兎に角ありとあらゆる可能性を考慮しつつ1度呼吸を整えたレナは、ゆっくりと把手を掴んで――全力で開け放つ。

「大丈――――」

「おかえり」

玄関先で棒のように真っ直ぐ立った少年の、昏く濁った瞳がレナのそれに絡み付いた。

■■■

一見すると、少年から何の異常も見て取る事は出来ない。

五体満足、顔色が悪い訳でもない。

それなりの頻度で夜更かしをするせいで目元には隈があるものの、何かしらの危害を加えられた形跡は存在しない――

「来てくれてありがとう。魔女と戦ったばかりなのに呼んじゃって、ごめん」

「それは構わないけど……アンタ大丈夫なの？」

「どうだろう、分かんない」

「分かんないってそんな……」

――――ように見えるだけだ。
彼自身が語る通り、レナには少年が健康、或いは健全であるようには到底思えなかった。
レナとて上手く言語化出来る訳ではないが、無理矢理表現するなら今の彼は「虚ろ」なのだ。
生気が無いとも言えるかもしれないが、およそ生きた人間が発する感情の動きが見えないのだ。
「……取り敢えずリビングで、座って話そうよ。正直混乱してて何から話せば良いか分からないんだ」
「そう、ね……」
とても混乱しているとは思えない、平坦な言葉と共に少年がリビングへと足を向ける。
これが本当に、恐怖に震えながらレナに対して助けを呼んだあの少年なのだろうか。
寧ろ、上辺だけ適当に取り繕った人形が少年を騙っているのだと考える方が自然であるようにすらレナには思えた。
そして人間がそうなる原因を、レナは1つ知っている。
「……魔女？」

そう、魔女の口づけだ。
魔女が標的とした人間に付着させるそれは、受けた者を「死」へと誘導する。
自殺、或いは事故を目的に行動させられる彼らは例外なく虚ろな――人間らしさを喪失した表情を取るのだ。
なるほど、これならば少年が生気を抜かれたような無機質さを漂わせているのも納得出来る。
「……分かんない。でも、そうかもしれない」
「そんな……」
そして少年の返答で、レナはどうしようもない程の確信を得た。
少年はレナが離れていたほんの数時間の内に、魔女か使い魔に襲われて口づけを受けてしまったのだ。
どうにか逃げ仰せたようだが、結界から離れた所で口づけの効果が消える訳ではない。
だから、せめてもの抵抗としてレナに助けを呼んだのだろうが――――
「何で……」
「？」
「何で黙ってたのよ！」

細胞の1つ1つから沸き上がる怒りの咆哮に任せて、レナは気が付けば少年の胸ぐらを掴んでいた。
それはあまりにも酷い――レナ自身ですら理不尽を感じるような暴言だ。
魔女に遭遇して生きて帰っただけでも喜ぶべきで、肝心な時に少年の側にいなかった自分を戒めるべきなのに、髪を逆立てんばかりの勢いで言葉を並べ立てなければ狂ってしまいそうな水波レナが其処にいた。
「何を……何をされたの」
「分からないんだ」
「え――――」
「自分の名前も顔も、何もかも分からなくなった」
――だが、虚ろな少年の虚ろな言葉が今度こそレナを粉々に粉砕した。
「鏡にさ、顔が映らないんだ。凄い真っ黒で、幼稚園児がテキトーにやった塗り絵みたいになってて」
「止め――」
「教科書もノートも全部黒塗りになって……いや、他の人が見たらどうなのかは知らないけど名前すら分かりゃしない」
「止めて――――」

「なぁレナ、どうしたらコレ治るんだろうな。魔女を倒せば戻るのか？なぁ――――」

少年の言葉には隠しきれない恐怖が滲んでいたが、その表情は不気味なまでに平坦だった。

言葉と肉体のバランスを、完全に喪失している。

即ち――今の少年は人形だ。

「自分」という糸を切られて転がっているだけの、世にも哀れな人形なのだ。

何も悪い事をしていない、普通の少年から人間性が喪失してしまったのである。

そしてそれを止められなかったのは誰だ？

――他でもない、水波レナだろう。

「何で……なんでぇ……！」

「ごめん……僕が油断してたばっかりに……」

「アンタは何も悪くないのに、なんでよぉ……！」

水波レナは泣いていた。

あまりにも不甲斐ない自分自身と、あれほど簡明直截な少年に苦難を強いた魔女に対して憎悪にも近い怒りを燃やして泣いていた。

そう、何が彼女だ。

何が「アンタの隣で強くなりたい」だ。

少年が命の危機に晒されている事にすら気付けなかった癖に、一体何の為の魔法少女なんだ。

あまりの滑稽さと浅ましさに、耳が腐り落ちそうだとすらレナは思った。

「ごめん……ごめんなさいい……！」

「レナは、悪くないだろ」

優しい――変わらず無機質だが、あまりにも優しい言葉だ。

つまり自分が如何なる状態なのか理解してなお、少年はレナを責めようとはしなかったのだ。

少年はレナよりずっと苦しいのに。

少年はレナよりずっと勇敢なのに。

だと言うのにレナは苦境に立たされた少年に縋っている。

どうしようもない位に甘えている。

――それは、未だ精神的に未熟な魔法少女が絶望するのには十分すぎる動機だった。

「レナのせいでぇっ……！」

「――レナ？」

運が良かったのか、悪かったのか。

どちらとも言い難いが、少年は崩れ落ちて泣くレナのソレに偶然気付いた。
気付いてしまった。
「ソウルジェムが……！」
「え、ぁ……？や、やだ……っ！」
レナの嗚咽に合わせて、胸の前で握った左手に指輪として嵌められていたソウルジェムがその青い輝きを失っていくのだ。
代わりに宝石を彩るのは――黒。
光を吸い込むような、或いは人の心の汚濁をそのまま表現したかのような「黒」がソウルジェムを黒く塗染め上げていく。
つまりは魔法少女の力そのものが絶望の色に塗り潰されているのだ。
それが何を意味するか――少年が慌ててレナに呼び掛けた時には、もう全てが遅かった。
Cendrillon
変身のドッペル
その性質は、ガラス靴
「あああああああああああ!?」

「なん――――!?」

絶叫するレナの背中を突き破るようにして出現したソレは、水色の――レナと同じ色の髪で覆われた、巨大な人間の頭部であった。

その側面からはガラスの靴を履いた「脚」と、楕円形の鏡を取り付けられた「腕」が1本ずつ生えている。

生物として必要な要件を満たしているとは思えないソレの形はあまりに奇怪で、異様で、冒涜的で――――否応なしに少年にある存在を想起させた。

「――魔女!?」

魔女だ。

何の言い訳も出来ない程に、ソレは魔女そのものな姿をしているのだ。

そして魔女はレナの慟哭を一手に引き受けたかのように、或いは貧乏揺すりでもするかのようにガンガンとヒールを床に打ち付けている。

「何でレナから魔女が出てくる……!」

あまりの異常事態に、少年は己の状態を忘れて悪態を吐いた。

確かに「自分」を失った事で大分堪えてはいるが、最早そうも言っていられないのだ。

兎に角、魔女の眼前で項垂れているレナを連れて、この場を離れなければならない。

「レナ!こっち来い!」

「――――」

そうしなければ死ぬ。

少年1人か2人合わせてかは分からなかったが、どちらかが死んでしまうのだ。

故に、飛び込むような勢いでレナに手を伸ばしたが――――

「来ないで」

「ごッお……!?」

鈍い音と共に、少年はリビングへと通じるドアに叩き付けられた。

レナの意を受けた魔女の鏡が、疑問を感じる時間すら与えずに少年を殴り飛ばしたのだ。

「な……んで……?」

「――――」

激しく明滅する少年の視界で、水色少女がゆっくりと立ち上がる。

相も変わらず俯いたまま、頬に涙の筋を光らせた少女が幽鬼のように立ち上がったのだ。

そしてそのまま――魔女を引き連れ、少年に背を向け歩き出す。

「……まて……よお」

「――――」

止めなければならない、と少年は悟った。

何か――何かとんでもない事をレナはしでかそうとしているのだ。

言葉にされずとも、表情が見えずとも少年には分かるのに、体が動かない。

滅茶苦茶な痛みに晒された肉体が言う事を聞かず、立ち上がる事すら出来ない。

「レ……ナ……」

「――――っ」

少年が無様に這い始める頃には、レナは既に玄関の扉を開けて秋の冷気を浴びていた。

そこで1度振り返った水色少女は、必死に手を伸ばす少年を名残惜しそうに眺め――

「ごめんね」

絶望に塗れた謝罪を残して、夜の闇へと走り去った。

■■■

変わる。
レナの姿が、どんどん変わる。
付かず離れずの距離を保って追従してくる魔女のせいか、はたまた魔法少女の力を制御出来なくなったのか、暗闇から街灯の光へ飛び出る度に「誰か」に変身してしまうのだ。
そして、レナの変身能力は「本人より本人らしい」と評される程精密であり、その変化は精神にまで及んでいる。
及んでしまっている。
それが制御不可能な程連続して発動すれば――
「うあぁぁぁぁぁ、あ、ぁ、ッあ、!?」
強烈な負荷と混濁、混線する意思の群れに頭を侵されレナは悲痛な叫び声を上げた。
だがそれも、彼女にとっては当然の事だった。
当然の報いだとして、受容しなければならなかった。
水波レナは何をした。
――少年の危機に気付きすらしなかった。
水波レナは何をした。
――誓いを立てたにも関わらず、少年を救う事が出来なかった。

水波レナは何をした。
――魔女を生み出した。
魔法少女が魔女に「成る」のか、魔法少女が魔女を「生む」のかレナは知らない。
だが、そんな事は彼女にとってあまりにも些細な問題だ。
そう、レナから生まれた魔女が少年を傷付けたのだ。
「こんな惨めな自分を見ないで欲しい」と、そう思っただけで魔女はそうしてしまったのだ。
間違いなく、レナ自身の意思で。
「いい、ッ、ひぃッ！ごめッ、ごめんな、ぁぁぁぁぁぁぁ……！」
――だから、走る。
視界が涙で滲んでも、肺が痛みを訴えても少女は滅茶苦茶に走り続ける。
それで彼が傷付かないなら。
魔女とそれを生み出したレナ自身を少年から遠ざけられるなら幾らでもそうしよう。
どうせ、魔女が消えない限り家に帰る事すら出来ないのだし。
「レナは、レナはぁ……！」
何の意味も持たない言葉を呪詛にして吐き出しつつ、水波レナはただ闇雲に走る。
――――それが、レナにとって運命の分かれ目だった。

もしもし聞いた？絶交階段のそのウワサ

どうしようもない、仮定の話である。

神浜市立大学附属学校中等部、東塔の北側、４階から屋上へ続く階段のコト

もしもレナが少しでも他者に相談する事を考えていたら。

絶交階段の６段目に自分の名前！７段目に絶交したい相手の名前を書いちゃえばそれが絶交証明書！

もしも行き場に困ったレナが神浜市立大学附属学校へと潜り込まなければ。

未来永劫ずーっと交際を絶つコトが認められるの！

あんな事にはならなかったのに――――

「ラ↘ン↗ラ↑ン↘ラ↑?!」

水より深くⅢ

「う……」

気絶していた少年が意識を取り戻したのは、もう間も無く日付が変わろうという時間帯であった。

結局の所魔女の強烈な一撃は、少年にレナを追いかける事はおろか満足に動く事すら許さなかったのだ。

「手の早さまでレナと一緒かよ、あの髪の毛ワカメ……」

実にフィジカル的で原始的な妨害だったと思いつつ、壁に手をついてふらふらと少年は立ち上がる。

相も変わらず――いや、未だ夜中だから当然ではあるが家中が暗い。

どろっとした空気が纏わり付いてくるような錯覚すら覚える。

だが、床に情けなく寝そべっている場合ではない。

少年が次にやる事は最初から決まっているのだ。

「……よし、歩ける」

――兎に角、レナを探しに行く。

ノックアウト寸前だが別に構いやしない。
深夜も深夜なので誰1人として助けは期待出来ないが、それもまた構いやしない。
と言うか、不思議な事に今や少年は体の底から湧き上がるやる気に満ち満ちてすらいた。
レナが何処にいようが地の果てまでおっかけて愛を囁いてやる（気色悪い）自信すらあった。
「1発ぶん殴られて目が覚めた、かな」
その自信に無理矢理理屈を付けるなら、きっとそうだ。
なるほど、「自分」に関する一切を喪失するのは誰にとっても辛い事だろう。
ある日突然鏡に顔が映らなくなったり、会話内容からしか自分が「喋っている」事を認識出来なくなったり、止めに紙に名前を書く事すら出来なくなる。
正直な所キツい。
すんごいキツい。
頭おかしくなりそう。
まだ謎のデバフかけられてから1日も経ってないけど、もうギブアップしそう。
――――でも、今はそんな事してる場合じゃない。
そんな事考えてる場合でもない。

「大丈夫……まだ、大丈夫な筈――」

腐れ魔女共がどんな生態をしているかは少年も知らないが、その姿は非人間的で非友好的であるとレナから聞いていた。人間に対しては凄まじく攻撃的とも。

ところがレナからは魔女が――「生えた」のだ。決して「成った」のではなく。

加えてもし少年の考える通り魔女がレナから生えてレナの意思に基づいて行動するなら、まだ可能性は残されている。

「キュゥべえ、見えるようになったら絶対にぶっ殺してやる……！」

今や、少年の疑惑は憤怒へと移行しつつあった。

魔法少女から魔女が出現する。

何の罪も無い少女達を胎として、人を襲う異形が育てられている。

そんな彼女達を魔法少女に誘ったのは――キュゥべえだ。

魔女に関する真実を知っていたのかは定かでないが、キュゥべえが魔法少女の契約を持ちかけたのは覆しようがない事実だ。

これさえなければ少年が名前を奪われる事も、レナが苦しい思いをする事も無かったのは間違いない。

――故にこそ「ぶっ殺す」。

1発ぶん殴る程度では、この烈火の如き怒りを晴らすには程遠いのだ。

ぎったんぎったんの、けちょんけちょんにしてやらねば少年の気が済まない。
「……行くか」
だが先ずはレナだ。
少女を狙う腐れ淫獣（キュウべえ）にかまけて事の本質を見失ってはいけない。
目的は3つ。
レナを見付ける。
レナとちゃんと話す。
レナと一緒に帰る。
それが今の少年の全てであり、為すべき事なのだ。
「よし、よし……立てる。歩ける。それならやれる」
ふらつく脚に活を入れ、キュゥべえへの怒りを両手足を支える礎に変換して、少年は寄りかかっていた壁から手を離した。
これは少年にとって、目下最大の懸念が解決された瞬間的でもある。
支えを得ずとも2足歩行が可能と確認出来たのだから、最早少年の行動を阻む要素は存在し得ないのだ。
ならば躊躇う必要もない。
「待ってろよ、レナ……！」

斯くして、１０月の冷えた空気に少年は足を踏み出した。
――愛する少女（水波レナ）がそうしたように、少年もまた帰るべき日常の光に世を向けた瞬間であった。

■■■

「――で、見付からなかったと」
「はい……」
時刻は１２時を半ば程過ぎ、全神浜市立大学附属学校生が待ち望んだ昼休みの喧騒を他所にして少年はがっくりとうなだれている。
昨日までの意気込みは何処へやら、目元に深い隈を作った不健康少年は屋上へと続く階段に腰掛けて萎れているのだ。
「折角快晴なのに、なーんで鍵閉まってるんすかね、ももこさん……」
「さぁ……。って言うか、生徒はそもそも立ち入り禁止だろ！」
「そーですね……」
普段は開けっ放しになっている屋上の扉が、今日に限っては施錠されている事もまた少年を消沈させるのに一役買っていた。

「どれ位探したのさ」
「まぁ、レナがいそうな場所は粗方……5時位までは探してました」
「終電も過ぎてただろうによくやるよ……」
「新西区を中心にして、参京区とか北養区とか行ってみましたけど……こりゃダメですね」
「ダメか」
階段の手摺に寄りかかったももこの問いに、少年は淡々とした答えを返す。
実際、少年は何も考えずに走り回っていた訳ではない。
いくら魔法少女とは言え、目視可能な魔女を侍らせた状態で行ける所なんて高が知れている――そんな浅はかな考えに基づいて、少年なりに色々と探し回っていたのだ。
結果は御覧の有り様だが。
「■■は何で参京区と北養区に絞ったのさ。中央とか水名とかに行ったかもしれないだろ」
「参京区にはレナがよく行っていたゲーセンがあるでしょう。ひょっとしたら其処で憂さ晴らしでもしてるんじゃないかって」
「あぁ……」
「まぁ時間が時間がなんでそもそも入店出来ませんでしたけど」

「そりゃそうか……」
２４時間営業しているゲーセンが無い訳ではない――だが、そんな所に学生が入れる訳はない。
レナなら「変身」して入店した可能性は十分に考えられるが、それを踏まえたとして少年に何か出来るという訳でもない。
よってレナはいないと仮定するしかない。
ちょっと考えれば分かる、バカみたいな話であった。
「北養は？」
「北養にはウォールナッツがありますし、まなかの所に行ったんじゃないかって」
「え、待って。あの２人ってそんなに仲良かったか？」
「僕はそう思いますよ。結構つるんでる所見掛けますし」
「そうかなぁ……」
「そうなんですよ。まぁ今回は空振りでしたけど……」
まなかには今度お礼をしなければならない、と少年は胸中で呟いた。
何しろシェフとしての勤めを終え、明日に備えて寝ようとしている所に厄介事を持ち込んでしまったのだ。
これでは過労待ったなしである。

電話越しに快く協力を申し出てくれたのもありがたいが、忙しい彼女に新たな負担が掛かってしまうのは間違いない。

正直に言って、少年はかなり申し訳なく思っていた。

そして、懸念がもう1人。

「秋野さんには、言ったんですか」

「いや、まだだ」

「でしょうねぇ……」

秋野かえで。

おどおどしていて、自主性に欠けていて、でも他人よりずっと優しい彼女がレナの状況を聞いて動揺しない筈がないだろう。

まぁそれでレナを助けようとする方向に動いてくれるのなら心強いが、正直に言ってしまえば期待も薄い。

ももこは兎も角少年はかえでと大して交流がある訳でもなし、いざそう言う状態になってしまったらどうケアしてやれば良いのかも分からないのだから伏せて置くのも已む無しだ。

それに、ももこにしたって辛いのは間違いない。

親友が行方不明になったかと思えばその彼氏も何か頭がおかしくなっていて、挙げ句

人から魔女が出てくる。
この時点でもう頭がパンクしたっておかしくないのに、更にその解決は自分の手腕に賭かっているのだ。
トドメに少年は自身の周囲で最も頼れる人物として彼女に包み隠さず打ち明けた訳で、そう言った視点からも期待を背負う填めになっている。
表面上は明るく振る舞っていても内側では重圧に押し潰されそうになっているのは明確だった。
そんな彼女にかえでまで背負えと言えるほど少年は愚かではない。
「迂闊に言えない……って言うか、誰に何を言っていけば良いのかもハッキリしないな」
「ですねぇ……まなかにも本当に悪い事をしました」
「でも協力してくれるんだろ？正直今は猫の手も借りたいし助かるよ」
もっと言ってしまえば、１番困惑したのは１００％まなかだろう。
もう全く以て無関係、同じ魔法少女である事を除けばよく話すシェフと客程度の関係しかない彼女に「レナから魔女が出ましたー」なんて言っても「は？」の一言で済まされるのが本来は自然。
それを「客を大切にする」シェフとしての矜持で――或いはもっと他に理由があるのかもしれないが、手助けしてくれるのだからもう頭が上がらない。

次に行った時は沢山食べて目一杯ウォールナッツの利益に貢献してやろうと少年は心に誓った。

そんな魔法少女達の支援を受ける少年に最も必要なのは、やはり情報。

何でも良いからレナに繋がる何かが欲しい。

「……やっぱり足りない」

「何が」

「何でも良いから、レナが其処にいなかった事を示す情報が」

「しらみ潰しに探すのか？そりゃ無茶だよ……神浜は広いんだからさ」

しかし破れかぶれな少年の意見は目を伏せたももこの反論で即座に叩き潰される。

正に八方塞がり。

元より分かっていた話ではあるが、最早少年の力ではどうしようもない。

魔法少女でもないただの一個人が奔走したところで、何百万人もの人々が行き交うこの神浜市で狙った1人を見つけ出すなど無理ゲー以下なのだ。

されど決意は揺るがない。

少年は名前を奪われようが何をされようが今この瞬間もまだ水波レナの彼氏であり、彼女だけの為に奔走するたった1人のヒーローだ。

で、あれば――――

「ももこさん、何か良い案ありません？」
「あるよ、１つだけ。飛びっきり胡散臭いのが」

やはり誰かに頼るしか、少年に残された道は無かった。

「――――」
「や、やちよ、さん……？」
七海やちよは控え目に言って、困惑していた。
常に冷静沈着、クールビューティーを地で行くような性格をしているにも関わらず、らしくない位に戸惑っていた。
その困惑っぷりには、彼女の後ろで縮こまっていた桃髪（環）の魔法少女（ろは）が思わずきょとん

としてしまう程である。
だが、それも仕方ないのだ。
何故なら――――

「力を貸して下さい！お願いします！」
「お……おい、ちょっと待てったら……！て言うか何でこんな時ばっかり無駄に力が強いんだよお前……！」

同じ魔法少女のよしみとしてあまりにも弱すぎるいろはを調整屋が根城とするミレナ座へと連れてきたその瞬間、あのどうにも胡散臭い家主ではなく土下座する見知らぬ少年に出迎えられたからである。
全く以て意味不明。
床に頭を擦り付ける少年を何とかひっぺがそうとしているももこも含めて、何もかもがやちよの理解の外にあった。
「えっと、その……」
「お願いします！」
「……」

そもそもこの少年は何者なのか。
何故調整屋にいるのか。
何故自分に物を頼んで――いや、土下座までして一体何を頼んでいるのか。
やちよは悩んだ。
その明晰な頭脳をフル回転させ、僅かな情報から事の真相を突き止めようとした。
その果てに――――

「と、取り敢えず、その……座って話しませんか？」
「そうね、そうしましょう」

後ろのいろはから上がった意見に、一も二もなく飛び付いた。

■■■

「むふっ、むふふ……！」

無数に積み上げられた本の山の合間で、少女は必死になって笑いを堪えていた。
これではいけない、もっとしっかりとした顔をしなくては「羽根」達に示しが付かない――そう思って表情を整えてみるものの、それもまたすぐに崩れてしまう。
「いやぁ、まさか本当に土下座するなんて思わなかったよ……」
だって、土下座だ。
今日びテレビとか漫画とか小説とか――教育にもメスが入る現代では専ら創作でしか見る事の出来ない懇願の究極形態が少女の視界に映っているのだ。
しかもそれをしているのは柊ねむが何より好意を抱いている少年なのだ。
「何処まで行ってもカッコ悪いなぁ、お兄さん……むふっ」
その無様さがねむには堪らない。
水波レナを救う為に必死になって、形振り構わず助けを求める情けなさが最高にそそる。
憧れの存在が、自身にとっての救世主が自らその尊厳を貶す度にねむの背筋にはゾクゾクとした快感が走るのだ。
性根が腐っていると言う自覚はある。
人として褒められたモノではない所か蔑まれて然るべきだと認識してもいる。
だが――止められない。

少年を魔法で監視するそのストーカー染みた奇行はまるで止められそうにない。
「それに、誰も僕の魔法に気付かないなんて……甘過ぎるんじゃないかい？」
そう、監視だ。
ねむは少年の体内に魔法を仕込んで彼を監視しているのだ。
柊ねむは恋愛に於ける敗北者であり少年からの認知度で言えばレナには遠く及ばないが、それを補って余りある程に強かで狡猾な策略家である。
そんな彼女がいつ魔法を仕込んだのか――残念ながらいつでも仕込めたからねむはもう覚えていない。
「やっぱり彼女達には任せられないな……彼を守る意志があったって実力が伴っていなければ、何の意味も無いだろうに」
そんな彼女からしてみれば、魔法少女としては超ベテランである七海やちよも含めた全員が少年に仕込んだ感覚同調魔法に気付いていないのは最高に「笑える」のだ。
レナ然り、ももこ然り、まなか然りどいつもこいつも方向性は違えど魔法少女として少年を守るつもりでいる癖に、
こんな適当に隠蔽しただけの魔法1つに気付けやしない。
それが――――ねむには気に食わない。

「まぁこれだけ数がいれば絶交階段に負けはしないと思うけど――どうせなら手助け、してしまおうか？」

少女は手元に置いてあった本から白紙の頁を1枚破りとって、シンプルな紙飛行機を折る。

そうして出来上がったそれをポイと放れば、風もないのに紙飛行機は宙を駆け――開け放たれた窓から、神浜市に向かって飛び立って行った。